

文部科学省委託調査

令和6年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善に係る取組」

子どもの成長過程を解明するための
長期的な縦断調査に資する調査研究

報告書

令和7年3月

株式会社サーベイリサーチセンター

目 次

I 調査研究の概要	3
1. 背景・目的	3
2. 実施内容	4
II 教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析	6
1. 検討・実施事項の概要	6
2. 読書習慣に関する分析	6
3. 習い事に関する分析	15
4. 就職活動の結果に関する分析	23
5. 調査回答者の変化に関する分析	38
III 平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討	54
1. 検討・実施事項の概要	54
2. 調査方法	55
3. 調査結果	56
4. 小括	63
V 参考資料	64
1. 本報告書で参照・言及した文献について	64
2. 本報告書で参照・言及した調査について	64

I 調査研究の概要

1. 背景・目的

「21 世紀出生児縦断調査(平成 13 年出生児)」(以下「平成 13 年出生児縦断調査」という。)は、厚生労働省が平成 13 年から実施していたところ、子供や若者を取り巻く環境がその後の進路選択等に与える影響を明らかにし、教育や就業に関する国の施策の企画立案、実施のための基礎資料を得るため、文部科学省が第 16 回(平成 29 年)から厚生労働省と共管の下で実施を引き継ぎ、現在までに第 22 回調査の結果までが公表されている。

「経済財政運営と改革の基本方針 2023」¹ においては、「各政策分野における KPI への Wellbeing 指標の導入を進める」ことが求められている。また、教育再生実行会議第 12 次提言² では、データによる政策立案として、「子供の成長過程を解明するための長期的な縦断調査」が求められている。さらに、「教育振興基本計画」³ は「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げるとともに、客観的な根拠を重視した教育政策の推進を求めている。平成 13 年出生児縦断調査は、「生活の満足度・人間関係について」等の質問項目を加える等、このような要請に応える調査として、毎回質問項目の検討を行っている。

「公的統計の整備に関する基本的な計画」第 IV 期基本計画⁴ では「今後5年間に講ずる具体的施策」において、「21 世紀出生児縦断調査(平成 22 年出生児)」(以下「平成 22 年出生児縦断調査」という。)の調査対象者の進学等を勘案し、関係府省との調整を含め、施策ニーズに即した今後の調査の方向性や調査内容について検討することについては「令和5年度(2023 年度)末までに結論を得る。」とされていたところ、厚生労働省では令和5年(2023 年)3月、「厚生労働統計の整備に関する検討会」の下に「縦断調査の改善に関するワーキンググループ」を設置し、令和6年(2024 年)2月9日の第3回ワーキンググループにおける中間まとめの中で、平成 13 年出生児縦断調査と同様、高校1年等を対象とする令和8年(第 16 回)調査から文部科学省を実施主体とする共管調査に変更することが適当であるという結論を得た。文部科学省においても、令和8年(2026 年)調査(第 16 回)以降、実施主体を文部科学省とする共管調査に変更することについて、「21 世紀出生児縦断調査(平成 13 年出生児)研究会」において検討を行ってき

¹ 「経済財政運営と改革の基本方針 2023 加速する新しい資本主義～未来への投資の拡大と構造的賃上げの実現～」(令和5年6月16日閣議決定)

² 「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について(第十二次提言)」(令和3年6月3日)

³ 文部科学省「教育振興基本計画」(令和5年6月16日閣議決定)

⁴ 総務省「公的統計の整備に関する基本的な計画」第 IV 期基本計画(令和5年3月28日閣議決定)

る。

これまでの 21 世紀出生児縦断調査に関する調査研究では、調査対象者が 30 歳になる頃までを視野に入れ、就労、結婚、出産、子育てなど、様々なライフイベントを捉える調査のほか、回顧法で教育経験等に関する情報を得ることについての提案がなされ、令和5年度の委託調査研究では、予備調査を実施して、回顧法による調査の可能性や課題についての知見が得られた。今後は、これらの成果をもとに、平成 22 年出生児縦断調査の文部科学省での実施に備える必要がある。

本調査研究はこれらの観点を踏まえて行うことで、「子供の成長過程を解明するための長期的な縦断調査」の実現に向けた調査項目の最適化を行うことを目的とする。

2. 実施内容

本調査研究では、主に教育政策の立案に資する分析を行うとともに、過去を振り返る回顧的な質問項目を今後の調査にどのように組み込むかを検討した。

なお、調査の実施・分析にあたっては、文部科学省が設けている「21 世紀出生児縦断調査(平成 13 年出生児)研究会」の有識者委員など、複数の有識者に対してヒアリングをし、助言を受けた。

(1)教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析

これまで蓄積・公開されてきた第 22 回までの平成 13 年出生児縦断調査の結果を基にした分析を検討・実施した。

いくつかの分析テーマを検討・設定して、今後分析を深めていくことを想定し、基礎的なデータの集計・分析を実施した。

(2)平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討

これまでの委託調査研究では、前述のとおり、回顧法で教育経験等に関する情報を得ることについて検討されてきた。令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」(子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析)⁵ では予備調査が実施され、回顧法に

⁵ 浜銀総合研究所(2024)「子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析 報告書」(令和 6 年 3 月)

よる調査の可能性や課題についての知見が得られている。

令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」(子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析)にて実施された予備調査の結果や、回顧的な調査項目に関する先行研究、調査をふまえて、第16回調査以降の調査項目に回顧的な調査項目をどのように配分していくべきか、改めてどのような調査項目を追加すべきかを検討した。

(3)有識者に対するヒアリング

主に「教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析」の「調査回答者の変化に関する分析」、「回顧的な調査項目」について検討を進めるにあたり、下記の有識者にヒアリングを行い、助言を受けた。

図表 1-1 ヒアリングを実施した有識者一覧

氏名(50音順、敬称略)	所属等
石田 浩	東京大学特別教授室・社会科学研究所特別教授
遠藤 利彦	東京大学大学院教育学研究科教授
佐藤 香	東京大学社会科学研究所社会調査・データアーカイブ研究センター教授
土屋 隆裕	横浜市立大学大学院データサイエンス研究科長
濱中 義隆	国立教育政策研究所高等教育研究部部長

Ⅱ 教育政策の立案に資する縦断調査の結果等の分析

1. 検討・実施事項の概要

本調査研究では、今後改めて教育施策に関連する分析を深めていくことを想定し、子供のころの読書習慣、習い事の内容に着目し、分析を行った。また、平成 13 年出生児縦断調査において、結果が公表されているなかで最新の第 22 回調査の結果の深掘りとして、4 年制大学に通う回答者の就職活動に関する集計・分析を行った。さらに、縦断調査の特性を生かし、調査回答者の変化を分析し、教育政策の立案に資する基礎的なデータを得ることを目的とした集計・分析を行った。

2. 読書習慣に関する分析

(1) 分析の背景・目的

教育振興基本計画では、教育政策の目標の一つに「目標2 豊かな心の育成」が掲げられている。この目標では、「子供たちの豊かな情操や道徳心を培い、正義感、責任感、自他の生命の尊重、他者への思いやり、自己肯定感、人間関係を築く力、社会性などを、学校教育活動全体を通じて育み、子供の最善の利益の実現と主観的ウェルビーイングの向上を図るとともに人格形成の根幹及び民主的な国家・社会の持続的発展の基盤を育む。」とされており、基本施策の一つに「読書活動の充実」が挙げられている。

子供のころの読書活動が子供のその後に与える影響に関しては、様々な先行研究が行われてきた。例えば国立青少年教育振興機構(2021)⁶では、子供のころの読書量が多い人ほど、非認知能力が高い傾向にあることが報告されている。しかしながら、「読書」の内容や形式の違いが非認知能力に及ぼす影響については、まだ十分に明らかにされていない。特に、小説や絵本などの物語性を有する読書と、雑誌やマンガといった娯楽的要素の強い読書との違いに注目することは、今後の教育施策を検討する上でも重要である。

本項では、平成 13 年出生児縦断調査の第 22 回調査の非認知能力に関する項目と第7回、第8回、第10 回調査の子供の読書習慣に関する項目を用いて、成年期の非認知能力と、子供のころの読書習慣とその内容にどのような関連があるのかを分析することを目的とした。

⁶ 国立青少年教育振興機構(2021)「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究 報告書」(令和3年3月)

(2)分析結果

①子供の読書習慣に関する回答

平成 13 年出生児縦断調査において、調査対象となっている子供の読書習慣に関する項目は、第7回、第8回、第 10 回調査の保護者調査で設定されている。具体的には、子供が1か月間に読んだ本の冊数に関する回答を得ており、各回の調査結果は図表 2-2-1、2-2-2 のとおりとなっている。本、小説などの読書習慣をみると、「読まない」の回答割合(=不読率)は第7回、第 8 回調査で6%前後、第 10 回調査では 8.7%となっており、第7回調査から第 10 回調査にかけて、本、小説などを読まなくなる変化がややみられる。雑誌・マンガの読書習慣をみると、「読まない」の回答割合は第7回調査で 43.4%、第8回調査で 34.1%、第 10 回調査で 19.0%となっており、第7回から第 10 回調査にかけて、雑誌・マンガを読むようになる変化がみられる。

なお、ここで示しているのは、第 22 回調査に回答があった者に限った集計結果である。

図表 2-2-1 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣(本、小説など)の回答結果

	上段:件数、下段:%						
	読 ま な い	1 冊	2 、 3 冊	4 、 5 、 6 冊	7 冊 以上	8 冊 以上	無 回 答
第 7 回調査 (n=21,523)	1,244 5.8	2,403 11.2	6,058 28.1	5,694 26.5	2,025 9.4	3,608 16.8	491 2.3
第 8 回調査 (n=21,523)	1,339 6.2	2,851 13.2	6,393 29.7	5,168 24.0	1,946 9.0	3,255 15.1	571 2.7
第10回調査 (n=21,523)	1,876 8.7	3,856 17.9	6,550 30.4	4,390 20.4	1,499 7.0	2,390 11.1	962 4.5

図表 2-2-2 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣(雑誌・マンガ)の回答結果

	上段:件数、下段:%						
	読 ま な い	1 冊	2 、 3 冊	4 、 5 、 6 冊	7 冊 以上	8 冊 以上	無 回 答
第 7 回調査 (n=21,523)	9,335 43.4	5,038 23.4	3,567 16.6	978 4.5	214 1.0	444 2.1	1,947 9.0
第 8 回調査 (n=21,523)	7,336 34.1	5,300 24.6	4,195 19.5	1,588 7.4	401 1.9	825 3.8	1,878 8.7
第10回調査 (n=21,523)	4,097 19.0	4,981 23.1	5,449 25.3	2,746 12.8	827 3.8	1,828 8.5	1,595 7.4

②非認知能力に関する項目の回答

平成 13 年出生児縦断調査の第 22 回調査の本人(子供)調査において、非認知能力に関する項目は、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」、「精神的健康」が設定されている。

<自尊感情>

自尊感情に関する項目は、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分には、自慢できるところがない」、「自分に対して肯定的である」、「だいたいにおいて、自分に満足している」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の 6 つの項目が設定されている。

これらの項目について、信頼性係数⁷の値を踏まえ、「自分には、自慢できるところがない」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の項目を除いた 4 つの項目で、「とてもあてはまる」を 4 点、「ややあてはまる」を 3 点、「どちらともいえない」を 2 点、「あまりあてはまらない」を 1 点、「まったくあてはまらない」を 0 点とし、単純加算して 0 点～16 点の「自尊感情」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「自尊感情」の得点指標の平均値は 9.44 点となった。

<がまん強さ(ねばり強さ)>

がまん強さ(ねばり強さ)に関する項目は、「新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある」(逆転項目)、「困難があっても、私はやる気を失わない」、「あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある」(逆転項目)、「私は頑張り屋だ」、「目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある」(逆転項目)、「数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい」(逆転項目)、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」、「私は精魂傾けてものごとに取り組む」の 8 つの項目が設定されている。

これらの項目について、「非常にあてはまる」を 4 点、「かなりあてはまる」を 3 点、「少しあてはまる」を 2 点、「あまりあてはまらない」を 1 点、「全くあてはまらない」を 0 点とし(4 項目は逆転項目として処理)、単純加算して 0 点～32 点の「がまん強さ(ねばり強さ)」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「がまん強さ(ねばり強さ)」の得点指標の平均値は 15.91 点となった。

⁷ クロンバックの α 係数。複数の質問項目を基に合成指標(得点)を算出する際に、各質問項目が全体として同じ内容を測定したものであるかを確認するために算出するもの。0～1 の値をとり、1 に近いほど、各質問項目が全体として同じ内容を測定したものであると考えられる。

<精神的回復力(レジリエンス)>

精神的回復力(レジリエンス)に関する項目は、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」、「自分の感情をコントロールできる方だ」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」、「新しいことや珍しいことが好きだ」、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」、「ものごとに対する興味や関心が強い方だ」、「怒りを感じるとおさえられなくなる」(逆転項目)、「自分の将来に希望をもっている」の9つの項目が設定されている。

これらの項目について、「はい」を4点、「どちらかというとはい」を3点、「どちらともいえない」を2点、「どちらかというといいえ」を1点、「いいえ」を0点とし(1項目は逆転項目として処理)、単純加算して0点～36点の「精神的回復力(レジリエンス)」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「精神的回復力(レジリエンス)」の得点指標の平均値は 23.07 点となった。

<精神的健康>

精神的健康に関する項目は、WHO-5 精神的健康状態表⁸に基づき、「明るく、楽しい気分で過ごした」、「落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」、「意欲的で、活動的に過ごした」、「ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた」、「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」の5つの項目が設定されている。

これらの項目について、「いつも」を5点、「ほとんどいつも」を4点、「半分以上の期間を」を3点、「半分以下の期間を」を2点、「ほんのたまに」を1点、「まったくない」を0点とし、単純加算して0点～25点の「精神的健康」の得点指標(得点が高い方が肯定的な回答であることを示す)を作成した。この「精神的健康」の指標の平均値は 13.78 点となった。なお、「精神的健康」の指標については、13 点未満である場合に精神的健康状態が低いことを示しているとされている。算出した指標を「13 点以上(13 点～25 点)」と「13 点未満(0～12 点)」に分類すると、「13 点以上(13 点～25 点)」の割合は 54.3%、「13 点未満(0～12 点)」35.7%となっており、精神的健康状態が低い状態にある回答者が一定数いるという結果になった。

(3)子供のころの読書習慣と非認知能力の関連性

第7回、第8回、第10回調査の子供の読書習慣に関する項目と第22回調査の非認知能力に関する項

⁸ <https://www.psychiatri-regionh.dk/who-5/who-5-questionnaires/Pages/default.aspx>

目の関係を確認するため、重回帰分析を行うこととした。

分析においては、前述の第 22 回調査の非認知能力に関する項目の得点指標を従属変数とし、第7回、第8回、第 10 回調査の「子供の読書習慣」を独立変数とした。独立変数とする第7回、第8回、第 10 回調査の「子供の読書習慣」は、各回「1冊以上読んでいる」を1、「読んでいない」を0としたダミー変数を投入し、分析を行った。

<「自尊感情」に関する回帰分析>

「自尊感情」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、自尊感情の得点が有意に高い傾向を示した($B=.366$ 、 $SE=.132$ 、 $p=.005$)。また、第8回調査時点においても同様の傾向がみてとれたが($B=.249$ 、 $SE=.131$ 、 $p=.057$)、有意水準には達しなかった。これらの結果は、学齢期の初期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣と第 22 回調査時点の自尊感情の間に正の関連があることを示している。

一方で、第7回、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、自尊感情の得点が有意に低い傾向を示した(第7回調査時点: $B=-.157$ 、 $SE=.065$ 、 $p=.016$ 、第8回調査時点: $B=-.153$ 、 $SE=.069$ 、 $p=.026$)。この結果は、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣と自尊感情の間に負の関連があることを示している。

なお、第 10 回調査時点における本(小説や絵本など)、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣は、いずれも自尊感情との有意な関連は認められなかった(本(小説や絵本など): $B=.133$ 、 $SE=.108$ 、 $p=.216$ 、雑誌・マンガ: $B=-.017$ 、 $SE=.078$ 、 $p=.827$)。

図表 2-2-3 第7回、第 8 回、第 10 回調査の読書習慣と自尊感情に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第 7 回調査時点の本 (小説、絵本) の読書習慣	0.366 **	0.132
第 7 回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.157 *	0.065
第 8 回調査時点の本 (小説、絵本) の読書習慣	0.249	0.131
第 8 回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.153 *	0.069
第10回調査時点の本 (小説、絵本) の読書習慣	0.133	0.108
第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.017	0.078
n	18,918	
修正済み決定係数	0.005	

*は 5 %、**は 1 %、***は 0.1 %水準で統計的有意を示す

<「がまん強さ(ねばり強さ)」に関する回帰分析>

「がまん強さ(ねばり強さ)」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に高い傾向を示した($B=.424$ 、 $SE=.196$ 、 $p=.031$)。この結果は、学齢期の初期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣と第22回調査時点のがまん強さ(ねばり強さ)の間に正の関連があることを示している。

一方で、第8回、第10回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に低い傾向を示した(第8回調査時点: $B=-.420$ 、 $SE=.102$ 、 $p<.001$ 、第10回調査時点: $B=-.543$ 、 $SE=.116$ 、 $p<.001$)。この結果は、雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣とがまん強さ(ねばり強さ)の間に負の関連があることを示している。

なお、第8回、第10回調査時点における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣は、いずれもがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった(第8回調査時点: $-.033$ 、 $SE=.195$ 、 $p=.865$ 、第10回調査時点: $B=-.107$ 、 $SE=.160$ 、 $p=.505$)。また、第7回調査時点における雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣もがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった($B=-.148$ 、 $SE=.096$ 、 $p=.124$)。

図表 2-2-4 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣とがまん強さ(ねばり強さ)に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.424 *	0.196
第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.148	0.096
第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	-0.033	0.195
第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.420 ***	0.102
第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	-0.107	0.160
第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.543 ***	0.116
n	18,817	
修正済み決定係数	0.005	

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的回復力(レジリエンス)」に関する回帰分析>

「精神的回復力(レジリエンス)」について、重回帰分析を行った結果、第7回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に高い傾向を示した($B=.690$ 、 $SE=.257$ 、 $p=.007$)。また、第8回調査時点においても同様の傾向がみとれ($B=.840$ 、 $SE=.254$ 、 $p<.001$)、第10回調査時点においても同様の傾向がみとれた($B=.503$ 、 $SE=.209$ 、 $p=.016$)。これらの結果は、学齢期の初期から中期段階において、本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣と第22回調査時点の精神的回復力(レジリエンス)の間に正の関連があることを示している。

一方で、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に低い傾向を示した($B=-.482$ 、 $SE=.134$ 、 $p<.001$)。

なお、第7回調査、第10回調査時点における雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣は、いずれも精神的回復力(レジリエンス)との有意な関連は認められなかった(第7回調査時点: $B=-.233$ 、 $SE=.126$ 、 $p=.065$ 、第10回調査時点: $B=-.212$ 、 $SE=.152$ 、 $p=.163$)。

図表 2-2-5 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣と精神的回復力(レジリエンス)に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.690 **	0.257
第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.233	0.126
第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.840 ***	0.254
第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.482 ***	0.134
第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.503 *	0.209
第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.212	0.152
n	18,651	
修正済み決定係数	0.004	

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的健康」に関する回帰分析>

「精神的健康」について、重回帰分析を行った結果、第10回調査時点で本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的健康の得点が有意に高い傾向を示した($B=.509$ 、 $SE=.162$ 、 $p=.002$)。この結果は、学齢期中期段階における本(小説や絵本など)を1か月に1冊以上読む習慣と第22回調査時点の精神的健康の間に正の関連があることを示している。

一方で、第8回調査時点で雑誌・マンガを1か月に1冊以上読む習慣があった子供は、精神的健康の得点が有意に低い傾向を示した($B=-.263$ 、 $SE=.103$ 、 $p=.011$)。

なお、その他の変数については、いずれも精神的健康との有意な関連は認められなかった。

図表 2-2-6 第7回、第8回、第10回調査の読書習慣と精神的健康に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第7回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.369	0.198
第7回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.083	0.098
第8回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.273	0.197
第8回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.263 *	0.103
第10回調査時点の本(小説、絵本)の読書習慣	0.509 **	0.162
第10回調査時点の雑誌・マンガの読書習慣	-0.205	0.117
n	19,356	
修正済み決定係数	0.002	

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

(4)小括

本項では、成年期の非認知能力と、子供のころの読書習慣とその内容にどのような関連があるのかを確認するため、分析を行った。その結果、子供のころに本(小説や絵本など)の読書習慣がある場合と雑誌やマンガの読書習慣がある場合とで、成年期の非認知能力との関連に質的な違いがある可能性が示唆された。

自尊感情に関しては、1か月に1冊以上本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において高い得点が認められ、物語読書と自尊感情の間に正の関連があることが示された。対照的に、雑誌やマンガを読む習慣には負の関連が認められ、読書内容や形式によって自尊感情との関連に差異がある可能性が示された。

また、がまん強さ(ねばり強さ)についても、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において高い得

点が認められ、物語読書と集中力や持続力等のがまん強さ(ねばり強さ)の間に正の関連があることが示された。対照的に、雑誌やマンガを読む習慣では負の関連が認められ、読書スタイルの違いによってがまん強さ(ねばり強さ)との関連に差異がある可能性が示された。

精神的回復力(レジリエンス)についても、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において一貫して高い得点が認められ、物語読書と心理的柔軟性や適応力の間に正の関連があることが示された。一方、雑誌やマンガの読書習慣については負の関連が認められた。

最後に、精神的健康に関しては、本(小説や絵本など)を読む習慣がある子供において有意に高い得点が認められ、本(小説や絵本など)を読む習慣と精神的健康の間に正の関連があることが示された。一方、雑誌やマンガの読書習慣については負の関連が認められた。

このように、子供のころの小説や絵本を読む習慣と自尊感情、がまん強さ、精神的回復力、精神的健康の向上に正の関連があり、読書内容や形式の違いによって成年期の非認知能力に異なる関連があることが確認された。しかしながら、本分析は観察データに基づいており、因果関係を直接的に示すものではない。この関係性は、共通の背景要因等によって生じている可能性も考えられるため、解釈には注意が必要である。

3. 習い事に関する分析

(1) 分析の背景・目的

教育振興基本計画では、前述のとおり、教育政策の目標の一つに「目標2 豊かな心の育成」が掲げられている。この目標の基本施策に「体験活動・交流活動の充実」や「伝統や文化等に関する教育の推進」などが挙げられている。また、教育政策の目標には「目標3 健やかな体の育成、スポーツを通じた豊かな心身の育成」も掲げられており、この目標では、「生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質・能力を育成するとともに、生活習慣の確立や学校保健の推進等により、心身の健康の増進と体力の向上を図る。」とされている。

子供のころの体験活動が子供のその後に与える影響に関しては、平成 13 年出生児縦断調査の結果を用いた分析がいくつか行われている。浜銀総合研究所(2021)⁹では、小学生のころの体験活動(自然体験、社会体験、文化的体験)が、体験によって結びつき方が一様ではないものの、その後の非認知能力等の向上に影響を与えていることが報告されている。また、浜銀総合研究所(2023)¹⁰においても、小学校高学年時点における各種体験活動の経験がその後の非認知能力等により影響を与えている可能性があることが報告されている。しかしながら、「体験活動」の内容は、学校行事以外で1年間に行った「自然体験」や「社会体験」、「文化的体験」であり、それらの体験内容には、定期的な体験活動にあたる習い事の内容は含まれていない。習い事には定期的なスポーツ体験や、音楽や絵画などの定期的な文化芸術活動があり、これらとその後の非認知能力の関連を確認することも有用と考える。

本項では、平成 13 年出生児縦断調査の第 22 回調査の非認知能力に関する項目と第3回、第6回、第12 回調査の習い事の内容に関する項目を用いて、成年期の非認知能力と定期的な体験活動の内容にどのような関連があるのかを分析することを目的とした。

(2) 分析結果

① 習い事の内容に関する回答

平成 13 年出生児縦断調査において、調査対象となっている子供の習い事に関する項目は、第3回から

⁹ 浜銀総合研究所(2021)「青少年の体験活動の推進に関する調査研究 報告書」(令和3年3月)

¹⁰ 浜銀総合研究所(2023)「21 世紀出生児縦断調査(平成 13 年出生児)特別報告」(令和5年3月)

第12回調査の保護者調査で設定されている。具体的には、習い事を行っているかや習い事の内容などに関する回答を得ている。本項では、最も子供の年齢が低い時点の第3回調査、小学校入学前の第6回調査、中学校入学前の第12回調査時点で行っている習い事の内容に着目して分析を行うこととした。その際、習い事の内容を「スポーツ系」、「芸術系」、「教育系」、「その他」の4つに分類した。それぞれの分類に含まれる習い事の内容は図表2-3-1のとおりである。

図表2-3-1 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容(4分類)

調査回	スポーツ系	芸術系	教育系	その他
第3回	「体操」 「バレエ」 「水泳」	「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」	「幼児教育」 「入園のための学習塾」 「英語」	「その他」
第6回	「体操」 「バレエ」 「水泳」	「習字」 「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」	「幼児教育」 「入園・入学のための学習塾」 「そろばん」 「英語」	「その他」
第12回	「体操」 「水泳」 「野球・ソフトボール」 「サッカー」 「テニス」 「剣道・柔道などの武術」 「バレエ、ダンス、舞踊」	「習字(硬筆含む)」 「音楽(ピアノなど)」 「絵・工作」 「華道・茶道」	「英会話(他の外国語を含む)」 「そろばん」	「その他」

各回の調査結果は図表2-3-2のとおりとなっている。スポーツ系の習い事をみると、第3回調査時点では3割台半ばとなっているが、第6回、第12回調査では半数以上となっている。芸術系の習い事は第3回調査時点では2割近くとなっているが、第6回、第12回調査では4割近くとなっている。教育系の習い事は第3回調査では半数以上となっているが、第6回、第12回調査では減少傾向にある。

なお、ここで示しているのは、各回で習い事を「している」と回答し、第22回調査に回答があった者に限った集計結果である。

図表 2-3-2 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容(4分類)の回答結果(多肢選択)

	上段:件数、下段:%			
	スポーツ系	芸術系	教育系	その他
第3回調査 (n=3,274)	1,108 33.8	560 17.1	1,778 54.3	335 10.2
第6回調査 (n=12,650)	7,020 55.5	4,782 37.8	4,151 32.8	2,716 21.5
第12回調査 (n=16,471)	9,810 59.6	7,464 45.3	4,632 28.1	2,791 14.3

②子供のころの習い事の内容と非認知能力の関連性

第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容」と第22回調査の非認知能力に関する項目の関係を確認するため、重回帰分析を行うこととした。なお、非認知能力に関する項目は、本章「2. 読書習慣に関する分析」と同様に、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」、「精神的健康」それぞれ得点指標を作成した。

分析においては、前述の第22回調査の非認知能力に関する項目の得点指標を従属変数とし、前述の第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容(4分類)」を独立変数とした。独立変数とする第3回、第6回、第12回調査の「子供の習い事の内容(4分類)」は、各回、分類ごとに「行っている」を1、「行っていない」を0としたダミー変数を投入し、分析を行った。

<「自尊感情」に関する回帰分析>

「自尊感情」について、重回帰分析を行った結果、第6回調査時点でスポーツ系の習い事、芸術系の習い事を行っていた子供は、自尊感情の得点が有意に高い傾向を示した(スポーツ系: $B=.560$ 、 $SE=.177$ 、 $p=.002$ 、芸術系: $B=.378$ 、 $SE=.177$ 、 $p=.033$)。第12回調査時点においてもスポーツ系の習い事を行っていた子供は同様の傾向がみとれた($B=.490$ 、 $SE=.184$ 、 $p=.008$)。これらの結果は、学齢期の初期段階から中期段階における定期的なスポーツ体験や芸術体験と第22回調査時点の自尊感情の間に正の関連があることを示している。

なお、その他の変数については、いずれも自尊感情との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-3 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容と自尊感情に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.149	0.236
第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.289	0.265
第3回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.133	0.243
第3回調査時点でその他の習い事を行っている	-0.501	0.320
第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.560 **	0.177
第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.378 *	0.177
第6回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.072	0.175
第6回調査時点でその他の習い事を行っている	0.389	0.202
第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.490 **	0.184
第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている	-0.029	0.181
第12回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.249	0.170
第12回調査時点でその他の習い事を行っている	0.351	0.240
n	18,918	
修正済み決定係数	0.011	

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「がまん強さ(ねばり強さ)」に関する回帰分析>

「がまん強さ(ねばり強さ)」について、重回帰分析を行った結果、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、がまん強さ(ねばり強さ)の得点が有意に高い傾向を示した($B=.560$ 、 $SE=.278$ 、 $p=.044$)。この結果は、学齢期の中期段階における定期的なスポーツ体験と第 22 回調査時点のがまん強さ(ねばり強さ)の間に正の関連があることを示している。

なお、その他の変数については、いずれもがまん強さ(ねばり強さ)との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-4 第3回、第6回、第 12 回調査の習い事の内容とがまん強さ(ねばり強さ)に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第 3 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	-0.083	0.356
第 3 回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.139	0.398
第 3 回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.072	0.366
第 3 回調査時点でその他の習い事を行っている	0.165	0.484
第 6 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	-0.171	0.268
第 6 回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.053	0.268
第 6 回調査時点で教育系の習い事を行っている	-0.220	0.266
第 6 回調査時点でその他の習い事を行っている	-0.201	0.306
第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.560 *	0.278
第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.001	0.274
第12回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.127	0.257
第12回調査時点でその他の習い事を行っている	0.268	0.363
n	18,817	
修正済み決定係数	-0.003	

*は 5 %、**は 1 %、***は 0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的回復力(レジリエンス)」に関する回帰分析>

「精神的回復力(レジリエンス)」について、重回帰分析を行った結果、第6回、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、精神的回復力(レジリエンス)の得点が有意に高い傾向を示した(第6回調査時点:B=.949、SE=.341、p=.005、第12回調査時点:B=1.019、SE=.353、p=.004)。これらの結果は、学齢期の初期段階から中期段階における定期的なスポーツ体験と第22回調査時点の精神的回復力(レジリエンス)の間に正の関連があることを示している。

なお、その他の変数については、いずれも精神的回復力(レジリエンス)との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-5 第3回、第6回、第12回調査の習い事の内容と精神的回復力(レジリエンス)に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第3回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	-0.508	0.452
第3回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.143	0.506
第3回調査時点で教育系の習い事を行っている	-0.269	0.465
第3回調査時点でその他の習い事を行っている	-0.503	0.616
第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.949 **	0.341
第6回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.594	0.342
第6回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.179	0.337
第6回調査時点でその他の習い事を行っている	0.405	0.388
第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	1.019 **	0.353
第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.131	0.349
第12回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.375	0.327
第12回調査時点でその他の習い事を行っている	0.368	0.461
n	18,651	
修正済み決定係数	0.005	

*は5%、**は1%、***は0.1%水準で統計的有意を示す

<「精神的健康」に関する回帰分析>

「精神的健康」について、重回帰分析を行った結果、第6回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供は、精神的健康の得点が有意に高い傾向を示した($B=.863$ 、 $SE=.258$ 、 $p<.001$)。この結果は、学齢期の初期段階における定期的なスポーツ体験と第 22 回調査時点の精神的健康の間に正の関連があることを示している。

なお、その他の変数については、いずれも精神的健康との有意な関連は認められなかった。

図表 2-3-6 第3回、第6回、第 12 回調査の習い事の内容と精神的健康に関する回帰分析

	係数	標準誤差
第 3 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.097	0.343
第 3 回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.204	0.384
第 3 回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.525	0.353
第 3 回調査時点でその他の習い事を行っている	0.005	0.467
第 6 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.863 ***	0.258
第 6 回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.442	0.258
第 6 回調査時点で教育系の習い事を行っている	-0.319	0.255
第 6 回調査時点でその他の習い事を行っている	0.106	0.293
第12回調査時点でスポーツ系の習い事を行っている	0.381	0.267
第12回調査時点で芸術系の習い事を行っている	0.151	0.264
第12回調査時点で教育系の習い事を行っている	0.103	0.247
第12回調査時点でその他の習い事を行っている	-0.174	0.350
n	19,356	
修正済み決定係数	0.005	

*は 5 %、**は 1 %、***は 0.1%水準で統計的有意を示す

(3)小括

本項では、成年期の非認知能力と定期的な体験活動である習い事の内容にどのような関連があるのかを確認するため、分析を行った。その結果、スポーツ系の習い事の経験と成年期の非認知能力に関連がある可能性が示唆された。

自尊感情に関しては、第 6 回、第 12 回調査時点においてスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められた。また、第 6 回調査時点において芸術系の習い事を行っていた子供においても、自尊感情の得点が高い傾向が認められた。これにより、学齢期の初期段階から中期段階におけるスポーツや芸術に関する定期的な体験活動と自尊感情の間に正の関連がある可能性が示された。

がまん強さ(ねばり強さ)については、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められ、スポーツ活動における反復練習や困難な状況への対処とがまん強さ(ねばり強さ)の間に正の関連がある可能性が示された。

精神的回復力(レジリエンス)についても、第 6 回、第 12 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められ、スポーツ経験と心理的柔軟性や適応力の間に正の関連がある可能性が示された。

最後に、精神的健康に関しても、第 6 回調査時点でスポーツ系の習い事を行っていた子供において高い得点が認められ、定期的な身体活動と精神的健康の維持・向上の間に正の関連がある可能性が示された。

このように、子供のころのスポーツ系の習い事の経験が自尊感情、がまん強さ、精神的回復力、精神的健康の向上に正の関連があることが確認された。しかしながら、本分析は、前述の読書習慣に関する分析同様、観察データに基づいており、因果関係を直接的に示すものではない。習い事の状況に関しては、保護者の経済状況や教育感のほか、居住地域といった環境の影響も大きいことが考えられる。そのため、家庭環境や背景要因への配慮も欠かせないといえる。

平成 13 年出生児縦断調査には、小学校など、学齢期初期段階から中期段階における学校での体験活動の状況を確認している調査項目はない。しかしながら、学齢期初期段階から中期段階における学校での体験活動の状況と非認知能力の関連について分析を行うことができると、より教育政策に資する分析につなげることができると考える。

4. 就職活動の結果に関する分析

(1) 分析の背景・目的

平成 13 年出生児縦断調査は、前述のとおり、第 22 回調査の結果までが公表されている。第 22 回調査は、調査対象者が 22 歳の時点の調査であり、4 年制大学に進学している調査対象者は、浪人や休学、留年等をしていない場合は大学 4 年生の時点となる。第 21 回、第 22 回調査では、就職活動に関する項目を設置しており、就職活動の結果に関する分析を行える状況にある。

本項では、内々定を得ている回答者と得ていない回答者、内々定の企業数が多い回答者と少ない回答者など、それぞれどのような特徴があるのか、非認知能力に関する項目との関連をみることで確認することとした。

(2) 分析対象

第 22 回調査の結果を用いて分析を行うにあたり、下記の条件に該当する回答者を第 22 回調査時点で 4 年制大学に通っており、就職活動を行っている回答者として分析対象にした。

条件に該当する回答者は 7,416 名であった。

図表 2-4-1 就職活動を行っている回答者の条件

調査回	条件
第 21 回	・第 21 回調査時点で、過去 1 年間に何かしらの就職活動を行ったと回答している(問 17 就職活動の状況の問いで、1 つ以上「1 行った」と回答している)
第 22 回	・第 22 回調査時点で在学している(問 10 現在の状況の問いで、「1」～「3」のいずれかと回答している) ・第 22 回調査時点で通っている学校の種類が大学(問 11② 通っている学校の種類の問いで、「1」と回答している) ・第 22 回調査時点で過去に休学しておらず、今も休学していない(問 11⑦ 休学の状況の問いで、「3」と回答している) ・第 22 回調査時点で、過去 1 年間に何かしらの就職活動を行ったと回答している(問 18 就職活動の状況の問いで、1 つ以上「1 行った」と回答している)

(3)分析結果

①就職活動の結果に関する回答結果

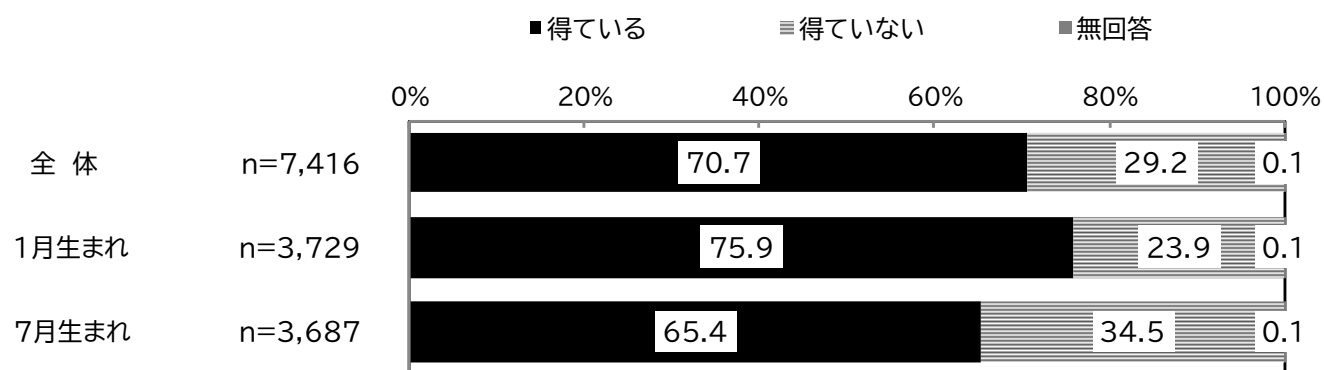
分析対象となった回答者の就職活動の結果に関する項目を集計した。

なお、平成13年出生児縦断調査の調査対象は、全国の平成13年に出生した子供のうち、1月10日～17日の間に出生した子(1月生まれ)と、7月10日～17日の間に出生した子(7月生まれ)である。調査時期は、1月生まれが令和4年12月19日～令和5年3月5日、7月生まれが令和5年7月10日～令和5年10月15日であるため、1月生まれの回答者は卒業年次の12～3月、7月生まれの回答者は卒業年次の7～10月に回答した情報となる。そのため、一部の集計は1月生まれの回答者と7月生まれの回答者を分けて集計を行った。

<内々定の状況>

内々定の状況は、全体で「得ている」が70.7%となっており、7割の回答者が内々定を得ていることが分かった。調査時期別でみると、1月生まれで「得ている」が75.9%、7月生まれで「得ている」が65.4%となっている。

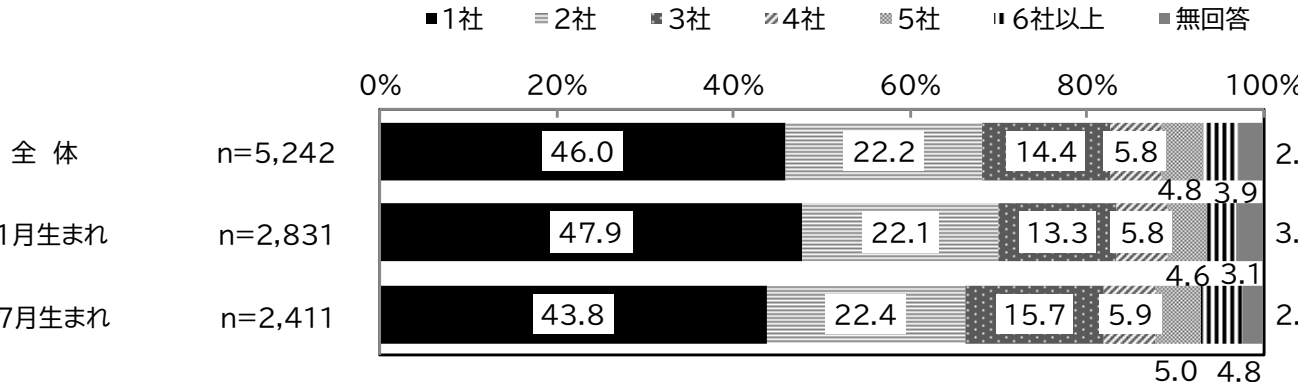
図表 2-4-2 内々定の状況



<内々定企業数>

内々定企業数は、全体で「1社」が 46.0%と最も多い割合を占めており、「2社」が 22.2%、「3社」が 14.4%となっており、平均内々定企業数は 2.18 社となっていた。調査時期別でみると、1月生まれ、7月生まれともに、「1社」が最も多い割合を占めており、1月生まれは 47.9%、7月生まれは 43.8%となっている。なお、平均内々定企業数は1月生まれが 2.10 社、7月生まれが 2.27 社となっていた。

図表 2-4-3 内々定企業数



<内々定を受けた時期>

内々定を受けた時期は、全体で「卒業年次の6月」が 18.8%と最も多い割合を占めている。6月までに内々定を得ている割合は 71.2%、7月以降に内々定を受けている割合は 28.1%となっていた。調査時期別でみると、1月生まれ、7月生まれともに、「卒業年次の6月」が最も多い割合を占めており、1月生まれは 15.4%、7月生まれは 22.7%となっている。なお、6月までに内々定を得ている割合は1月生まれが 62.8%、7月生まれが 81.6%となっており、7月以降に内々定を受けている割合は1月生まれが 36.7%、7月生まれが 18.0%となっている。

図表 2-4-4 内々定を受けた時期

上段:件数、下段:%															
	卒業 年次 前年 9月 以前	1 0 月	1 1 月	1 2 月	1 月	2 月	3 月	卒業 年次 4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	1 0 月 以降	無 回 答
全 体(n=5,242)	362 6.9	85 1.6	54 1.0	96 1.8	76 1.4	128 2.4	395 7.5	718 13.7	842 16.1	984 18.8	530 10.1	349 6.7	251 4.8	343 6.5	29 0.6
1月生まれ(n=2,831)	230 8.1	64 2.3	44 1.6	61 2.2	46 1.6	54 1.9	160 5.7	331 11.7	348 12.3	436 15.4	253 8.9	255 9.0	218 7.7	315 11.1	16 0.6
7月生まれ(n=3,018)	132 5.5	21 0.9	10 0.4	35 1.5	30 1.2	74 3.1	235 9.7	387 16.1	494 20.5	548 22.7	277 11.5	94 3.9	33 1.4	28 1.2	13 0.5

②就職活動の結果と非認知能力の関連性

①で算出した「内々定の状況」、「内々定企業数」と第22回調査の非認知能力に関する項目の関連性を確認するため、クロス集計を行った。本項で就職活動の結果との関連性を確認する非認知能力に関する項目は、「自尊感情」、「がまん強さ(ねばり強さ)」、「精神的回復力(レジリエンス)」とした。なお、本項では「内々定の状況」、「内々定企業数」それぞれ無回答(不詳)であった場合には、集計の対象外とした。また、1月調査の回答と7月調査の回答の結果は合算した結果である。

<内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)>

内々定の状況を自尊感情に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-5 のとおりとなっている。

結果として、どの自尊感情に関する項目も有意な差が確認された。「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分に対して肯定的である」、「だいたいにおいて、自分に満足している」、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」で「とてもあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合は、内々定を「得ている」回答者が「得ていない」回答者を上回っている。内々定を「得ている」回答者は、「物事を人並みには、うまくやれる」で「とてもあてはまる」と回答している割合が2割近く、「ややあてはまる」と回答している割合が5割台半ばを占めて高くなっている。

この結果から、内々定を得ている回答者は自尊感情が高い傾向がみてとれた。

図表 2-4-5 内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)

色々な良い素質を持っている

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,176)	得ていない (n=2,141)
とてもあてはまる	772 14.9	277 12.9
ややあてはまる	2,253 43.5	862 40.3
どちらともいえない	1,207 23.3	506 23.6
あまりあてはまらない	786 15.2	394 18.4
まったくあてはまらない	158 3.1	102 4.8

カイ二乗検定:p<0.001

物事を人並みには、うまくやれる

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,219)	得ていない (n=2,159)
とてもあてはまる	970 18.6	334 15.5
ややあてはまる	2,830 54.2	1,027 47.6
どちらともいえない	845 16.2	409 18.9
あまりあてはまらない	471 9.0	318 14.7
まったくあてはまらない	103 2.0	71 3.3

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-4-5 内々定の状況に関するクロス集計(自尊感情別)(続き)

自分には、自慢できるところがあまりない

	上段:件数、下段:%	
	得ている (n=5,211)	得ていない (n=2,154)
とてもあてはまる	359 6.9	216 10.0
ややあてはまる	1,410 27.1	608 28.2
どちらともいえない	1,310 25.1	528 24.5
あまりあてはまらない	1,738 33.4	637 29.6
まったくあてはまらない	394 7.6	165 7.7

カイ二乗検定: $p < 0.001$

自分に対して肯定的である

	上段:件数、下段:%	
	得ている (n=5,213)	得ていない (n=2,157)
とてもあてはまる	784 15.0	290 13.4
ややあてはまる	1,955 37.5	753 34.9
どちらともいえない	1,255 24.1	499 23.1
あまりあてはまらない	981 18.8	482 22.3
まったくあてはまらない	238 4.6	133 6.2

カイ二乗検定: $p < 0.001$

だいたいにおいて、自分に満足している

	上段:件数、下段:%	
	得ている (n=5,206)	得ていない (n=2,161)
とてもあてはまる	794 15.3	289 13.4
ややあてはまる	2,190 42.1	786 36.4
どちらともいえない	1,103 21.2	488 22.6
あまりあてはまらない	920 17.7	444 20.5
まったくあてはまらない	199 3.8	154 7.1

カイ二乗検定: $p < 0.001$

もっと自分自身を尊敬できるようになりたい

	上段:件数、下段:%	
	得ている (n=5,217)	得ていない (n=2,158)
とてもあてはまる	1,616 31.0	650 30.1
ややあてはまる	2,125 40.7	840 38.9
どちらともいえない	904 17.3	379 17.6
あまりあてはまらない	473 9.1	213 9.9
まったくあてはまらない	99 1.9	76 3.5

カイ二乗検定: $p < 0.001$

<内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)>

内々定の状況をがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-6 のとおりとなっている。

結果として、どのがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目も有意な差が確認された。「困難があっても、私はやる気を失わない」、「私は頑張り屋だ」、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」で「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「少しあてはまる」と回答した割合は、内々定を「得ている」回答者が「得ていない」回答者を上回っている。

この結果から、内々定を得ている回答者はがまん強さ(ねばり強さ)の回答割合が高い傾向がみとれた。

図表 2-4-6 内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)

新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,223)	得ていない (n=2,164)
非常にあてはまる	360 6.9	209 9.7
かなりあてはまる	1,019 19.5	489 22.6
少しあてはまる	2,159 41.3	826 38.2
あまりあてはまらない	1,533 29.4	584 27.0
全くあてはまらない	152 2.9	56 2.6

カイニ乗検定: $p < 0.001$

あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,211)	得ていない (n=2,162)
非常にあてはまる	500 9.6	258 11.9
かなりあてはまる	1,320 25.3	548 25.3
少しあてはまる	2,184 41.9	827 38.3
あまりあてはまらない	1,093 21.0	478 22.1
全くあてはまらない	114 2.2	51 2.4

カイニ乗検定: $p < 0.01$

目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,209)	得ていない (n=2,162)
非常にあてはまる	350 6.7	199 9.2
かなりあてはまる	1,190 22.8	563 26.0
少しあてはまる	2,046 39.3	758 35.1
あまりあてはまらない	1,475 28.3	574 26.5
全くあてはまらない	148 2.8	68 3.1

カイニ乗検定: $p < 0.001$

困難があっても、私はやる気を失わない

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,215)	得ていない (n=2,164)
非常にあてはまる	421 8.1	160 7.4
かなりあてはまる	1,374 26.3	476 22.0
少しあてはまる	1,944 37.3	770 35.6
あまりあてはまらない	1,338 25.7	670 31.0
全くあてはまらない	138 2.6	88 4.1

カイニ乗検定: $p < 0.001$

私は頑張り屋だ

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,210)	得ていない (n=2,159)
非常にあてはまる	766 14.7	277 12.8
かなりあてはまる	1,507 28.9	521 24.1
少しあてはまる	1,895 36.4	741 34.3
あまりあてはまらない	900 17.3	497 23.0
全くあてはまらない	142 2.7	123 5.7

カイニ乗検定: $p < 0.001$

数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,213)	得ていない (n=2,160)
非常にあてはまる	419 8.0	281 13.0
かなりあてはまる	1,031 19.8	473 21.9
少しあてはまる	1,637 31.4	623 28.8
あまりあてはまらない	1,810 34.7	650 30.1
全くあてはまらない	316 6.1	133 6.2

カイニ乗検定: $p < 0.001$

図表 2-4-6 内々定の状況に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる

私は精魂傾けてものごとに取り組む

上段:件数、下段:%

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,216)	得ていない (n=2,164)
非常にあてはまる	653 12.5	241 11.1
かなりあてはまる	1,581 30.3	587 27.1
少しあてはまる	2,003 38.4	792 36.6
あまりあてはまらない	876 16.8	459 21.2
全くあてはまらない	103 2.0	85 3.9

カイニ乗検定:p<0.001

	得ている (n=5,199)	得ていない (n=2,157)
非常にあてはまる	488 9.4	205 9.5
かなりあてはまる	1,451 27.9	541 25.1
少しあてはまる	2,171 41.8	836 38.8
あまりあてはまらない	985 18.9	510 23.6
全くあてはまらない	104 2.0	65 3.0

カイニ乗検定:p<0.001

<内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)>

内々定の状況を精神的回復力(レジリエンス)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-7 のとおりとなっている。

結果として、「自分の感情をコントロールできる方だ」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」、「自分の将来に希望をもっている」で有意な差が確認された。「自分の感情をコントロールできる方だ」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う」、「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」、「将来の見通しは明るいと思う」、「自分の将来に希望をもっている」で「はい」、「どちらかというとはい」と回答した割合は、内々定を「得ている」回答者が「得ていない」回答者を上回っている。

この結果から、内々定を得ている回答者は精神的回復力(レジリエンス)が高い傾向がみてとれた。

図表 2-4-7 内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)

色々なことにチャレンジするのが好きだ

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,216)	得ていない (n=2,163)
いいえ	193 3.7	100 4.6
どちらかというといいえ	821 15.7	355 16.4
どちらでもない	847 16.2	357 16.5
どちらかというとはい	2,016 38.7	813 37.6
はい	1,339 25.7	538 24.9

カイニ乗検定: $p > 0.05$ (ns)

自分の感情をコントロールできる方だ

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,208)	得ていない (n=2,158)
いいえ	161 3.1	95 4.4
どちらかというといいえ	627 12.0	311 14.4
どちらでもない	737 14.2	345 16.0
どちらかというとはい	2,165 41.6	857 39.7
はい	1,518 29.1	550 25.5

カイニ乗検定: $p < 0.001$

自分の未来にはきっといいことがあると思う

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,202)	得ていない (n=2,155)
いいえ	150 2.9	114 5.3
どちらかというといいえ	397 7.6	228 10.6
どちらでもない	993 19.1	503 23.3
どちらかというとはい	1,999 38.4	681 31.6
はい	1,663 32.0	629 29.2

カイニ乗検定: $p < 0.001$

新しいことや珍しいことが好きだ

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,200)	得ていない (n=2,162)
いいえ	111 2.1	50 2.3
どちらかというといいえ	556 10.7	208 9.6
どちらでもない	910 17.5	380 17.6
どちらかというとはい	2,017 38.8	815 37.7
はい	1,606 30.9	709 32.8

カイニ乗検定: $p > 0.05$ (ns)

動揺しても、自分を落ち着かせることができる

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,202)	得ていない (n=2,157)
いいえ	185 3.6	102 4.7
どちらかというといいえ	784 15.1	425 19.7
どちらでもない	968 18.6	419 19.4
どちらかというとはい	2,280 43.8	850 39.4
はい	985 18.9	361 16.7

カイニ乗検定: $p < 0.001$

将来の見通しは明るいと思う

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,204)	得ていない (n=2,154)
いいえ	253 4.9	203 9.4
どちらかというといいえ	649 12.5	372 17.3
どちらでもない	1,280 24.6	598 27.8
どちらかというとはい	1,922 36.9	614 28.5
はい	1,100 21.1	367 17.0

カイニ乗検定: $p < 0.001$

図表 2-4-7 内々定の状況に関するクロス集計(精神的回復力(レジリエンス)別)(続き)

ものごとに対する興味や関心が強い方だ

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,198)	得ていない (n=2,159)
いいえ	95 1.8	46 2.1
どちらかというといいえ	520 10.0	237 11.0
どちらでもない	882 17.0	356 16.5
どちらかというとはい	2,174 41.8	883 40.9
はい	1,527 29.4	637 29.5

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

怒りを感じるとおさえられなくなる

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,215)	得ていない (n=2,157)
いいえ	1,659 31.8	668 31.0
どちらかというといいえ	1,814 34.8	743 34.4
どちらでもない	908 17.4	382 17.7
どちらかというとはい	654 12.5	284 13.2
はい	180 3.5	80 3.7

カイ二乗検定:p>0.05(ns)

自分の将来に希望をもっている

上段:件数、下段:%

	得ている (n=5,204)	得ていない (n=2,157)
いいえ	235 4.5	199 9.2
どちらかというといいえ	571 11.0	319 14.8
どちらでもない	1,124 21.6	494 22.9
どちらかというとはい	2,067 39.7	696 32.3
はい	1,207 23.2	449 20.8

カイ二乗検定:p<0.001

<内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)>

内々定企業数を自尊感情に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-8 のとおりとなっている。

内々定企業数は、「1社」、「2社」、「3社」、「4社」、「5社」、「6社以上」の選択肢を設置し、回答を得ているが、本項では、「4社」、「5社」、「6社以上」の回答を合算し、「4社以上」としてクロス集計を行った。

結果として、「色々な良い素質を持っている」、「物事を人並みには、うまくやれる」、「自分には、自慢できるところがない」、「自分に対して肯定的である」で有意な差が確認された。内々定企業数が「4社以上」の回答者は、「色々な良い素質を持っている」、「自分に対して肯定的である」で「とてもあてはまる」と回答した割合が2割近く、「物事を人並みには、うまくやれる」で「とてもあてはまる」と回答した割合が2割台

半ばと、内々定企業数が「3社」以下の回答者と比較して高くなっている。

図表 2-4-8 内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)

色々な良い素質を持っている

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,386)	2 社 (n=1,147)	3 社 (n=748)	4 社以上 (n=749)
とてもあてはまる	317 13.3	174 15.2	120 16.0	143 19.1
ややあてはまる	998 41.8	502 43.8	345 46.1	353 47.1
どちらともいえない	573 24.0	270 23.5	162 21.7	143 19.1
あまりあてはまらない	403 16.9	171 14.9	107 14.3	93 12.4
まったくあてはまらない	95 4.0	30 2.6	14 1.9	17 2.3

カイ二乗検定: $p < 0.001$

物事を人並みには、うまくやれる

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,403)	2 社 (n=1,163)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=753)
とてもあてはまる	405 16.9	204 17.5	169 22.5	173 23.0
ややあてはまる	1,259 52.4	673 57.9	407 54.1	412 54.7
どちらともいえない	420 17.5	167 14.4	114 15.2	102 13.5
あまりあてはまらない	259 10.8	101 8.7	52 6.9	54 7.2
まったくあてはまらない	60 2.5	18 1.5	10 1.3	12 1.6

カイ二乗検定: $p < 0.001$

自分には、自慢できるところがあまりない

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,401)	2 社 (n=1,160)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=753)
とてもあてはまる	182 7.6	74 6.4	42 5.6	56 7.4
ややあてはまる	649 27.0	330 28.4	221 29.4	177 23.5
どちらともいえない	630 26.2	269 23.2	181 24.1	165 21.9
あまりあてはまらない	771 32.1	396 34.1	248 33.0	286 38.0
まったくあてはまらない	169 7.0	91 7.8	60 8.0	69 9.2

カイ二乗検定: $p < 0.05$

図表 2-4-8 内々定企業数に関するクロス集計(自尊感情別)(続き)

自分に対して肯定的である		上段:件数、下段:%		
	1 社 (n=2,401)	2 社 (n=1,157)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=754)
とてもあてはまる	341 14.2	186 16.1	114 15.2	131 17.4
ややあてはまる	881 36.7	421 36.4	291 38.7	313 41.5
どちらともいえない	596 24.8	292 25.2	164 21.8	147 19.5
あまりあてはまらない	469 19.5	210 18.2	150 19.9	124 16.4
まったくあてはまらない	114 4.7	48 4.1	33 4.4	39 5.2

カイ二乗検定: $p < 0.05$

だいたいにおいて、自分に満足している		上段:件数、下段:%		
	1 社 (n=2,399)	2 社 (n=1,155)	3 社 (n=750)	4 社以上 (n=754)
とてもあてはまる	352 14.7	183 15.8	117 15.6	130 17.2
ややあてはまる	1,003 41.8	487 42.2	310 41.3	338 44.8
どちらともいえない	504 21.0	240 20.8	162 21.6	139 18.4
あまりあてはまらない	438 18.3	210 18.2	141 18.8	110 14.6
まったくあてはまらない	102 4.3	35 3.0	20 2.7	37 4.9

カイ二乗検定: $p > 0.05$ (ns)

もっと自分自身を尊敬できるようになりたい		上段:件数、下段:%		
	1 社 (n=2,401)	2 社 (n=1,158)	3 社 (n=751)	4 社以上 (n=756)
とてもあてはまる	736 30.7	356 30.7	239 31.8	253 33.5
ややあてはまる	975 40.6	472 40.8	316 42.1	300 39.7
どちらともいえない	408 17.0	201 17.4	120 16.0	127 16.8
あまりあてはまらない	234 9.7	113 9.8	60 8.0	59 7.8
まったくあてはまらない	48 2.0	16 1.4	16 2.1	17 2.2

カイ二乗検定: $p > 0.05$ (ns)

<内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)>

内々定企業数をがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目別でクロス集計した結果は、図表 2-4-9 のとおりとなっている。内々定企業数は、自尊感情に関する項目別のクロス集計同様、「4社」、「5社」、「6社以上」の回答を「4社以上」としてクロス集計を行った。

結果として、どのがまん強さ(ねばり強さ)に関する項目も有意な差が確認された。「困難があっても、私はやる気を失わない」で「非常にあてはまる」と回答した割合が1割を超え、「かなりあてはまる」と回答した割合が3割を超えて、内々定企業数が「3社」以下の回答者と比較して高くなっている。また、「私は頑張り屋だ」も「非常にあてはまる」と回答した割合が2割近く、「かなりあてはまる」と回答した割合が3割を超えて、内々定企業数が「3社」以下の回答者と比較して高くなっている。さらに、「始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる」も「非常にあてはまる」と回答した割合が2割近く、「かなりあてはまる」と回答した割合が3割台半ばと、内々定企業数が「3社」以下の回答者と比較して高くなっている。

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)

新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,403)	2 社 (n=1,162)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=755)
非常にあてはまる	178 7.4	81 7.0	37 4.9	54 7.2
かなりあてはまる	452 18.8	230 19.8	157 20.9	152 20.1
少しあてはまる	1,034 43.0	474 40.8	300 39.9	288 38.1
あまりあてはまらない	665 27.7	354 30.5	240 31.9	230 30.5
全くあてはまらない	74 3.1	23 2.0	18 2.4	31 4.1

カイ二乗検定: $p < 0.05$

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

困難があっても、私はやる気を失わない

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,399)	2 社 (n=1,159)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=756)
非常にあてはまる	154 6.4	103 8.9	66 8.8	92 12.2
かなりあてはまる	591 24.6	289 24.9	208 27.7	239 31.6
少しあてはまる	926 38.6	438 37.8	254 33.8	256 33.9
あまりあてはまらない	651 27.1	301 26.0	209 27.8	156 20.6
全くあてはまらない	77 3.2	28 2.4	15 2.0	13 1.7

カイニ乗検定: $p<0.001$

あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,398)	2 社 (n=1,156)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=755)
非常にあてはまる	247 10.3	104 9.0	70 9.3	67 8.9
かなりあてはまる	605 25.2	287 24.8	199 26.5	195 25.8
少しあてはまる	1,038 43.3	493 42.6	307 40.8	285 37.7
あまりあてはまらない	453 18.9	254 22.0	162 21.5	188 24.9
全くあてはまらない	55 2.3	18 1.6	14 1.9	20 2.6

カイニ乗検定: $p<0.05$

私は頑張り屋だ

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,401)	2 社 (n=1,159)	3 社 (n=749)	4 社以上 (n=751)
非常にあてはまる	328 13.7	162 14.0	120 16.0	139 18.5
かなりあてはまる	650 27.1	346 29.9	225 30.0	240 32.0
少しあてはまる	895 37.3	424 36.6	262 35.0	251 33.4
あまりあてはまらない	451 18.8	200 17.3	123 16.4	105 14.0
全くあてはまらない	77 3.2	27 2.3	19 2.5	16 2.1

カイニ乗検定: $p<0.01$

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,394)	2 社 (n=1,159)	3 社 (n=750)	4 社以上 (n=755)
非常にあてはまる	179 7.5	75 6.5	42 5.6	51 6.8
かなりあてはまる	581 24.3	251 21.7	173 23.1	151 20.0
少しあてはまる	940 39.3	483 41.7	284 37.9	276 36.6
あまりあてはまらない	629 26.3	318 27.4	232 30.9	249 33.0
全くあてはまらない	65 2.7	32 2.8	19 2.5	28 3.7

カイ二乗検定: $p < 0.01$

数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,397)	2 社 (n=1,159)	3 社 (n=750)	4 社以上 (n=757)
非常にあてはまる	218 9.1	84 7.2	54 7.2	58 7.7
かなりあてはまる	507 21.2	232 20.0	153 20.4	114 15.1
少しあてはまる	757 31.6	381 32.9	229 30.5	214 28.3
あまりあてはまらない	787 32.8	390 33.6	265 35.3	313 41.3
全くあてはまらない	128 5.3	72 6.2	49 6.5	58 7.7

カイ二乗検定: $p < 0.001$

始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,401)	2 社 (n=1,161)	3 社 (n=752)	4 社以上 (n=754)
非常にあてはまる	262 10.9	152 13.1	94 12.5	129 17.1
かなりあてはまる	688 28.7	349 30.1	246 32.7	257 34.1
少しあてはまる	965 40.2	434 37.4	278 37.0	253 33.6
あまりあてはまらない	428 17.8	207 17.8	121 16.1	104 13.8
全くあてはまらない	58 2.4	19 1.6	13 1.7	11 1.5

カイ二乗検定: $p < 0.001$

図表 2-4-9 内々定企業数に関するクロス集計(がまん強さ(ねばり強さ)別)(続き)

私は精魂傾けてものごとに取り組む

上段:件数、下段:%

	1 社 (n=2,393)	2 社 (n=1,155)	3 社 (n=749)	4 社以上 (n=754)
非常にあてはまる	194 8.1	116 10.0	67 8.9	102 13.5
かなりあてはまる	615 25.7	325 28.1	216 28.8	249 33.0
少しあてはまる	1,021 42.7	479 41.5	317 42.3	283 37.5
あまりあてはまらない	507 21.2	221 19.1	133 17.8	106 14.1
全くあてはまらない	56 2.3	14 1.2	16 2.1	14 1.9

カイ二乗検定: $p < 0.001$

(4)小括

本項では、内々定を得ている回答者と得ていない回答者、内々定の企業数が多い回答者と少ない回答者など、それぞれどのような特徴があるのか、非認知能力に関する項目との関連をみるため、内々定の有無および内々定企業数と、自尊感情、がまん強さ(ねばり強さ)、精神的回復力(レジリエンス)のクロス集計を行った。

その結果、内々定を得ている回答者や内々定企業数が多い回答者は、全体的に肯定的な自己評価や特性を有している傾向がみられた。

これらの結果から、就職活動における成果には、学力やスキルのみならず、自尊感情やがまん強さ、精神的回復力といった非認知能力も大きく関わっている可能性が示唆される。

今後は、調査回答者の就職後の結果を分析することが可能になるため、就職後の継続性と非認知能力の関連性などについても分析されることが期待される。

5. 調査回答者の変化に関する分析

調査回答者の通学・就業状況に着目し、高等学校等へ通学している第 16 回調査から第 22 回調査間の変化に関する分析を行った。

(1)通学・就業状況の変化(第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査)

本項では、高校1年生相当の第 16 回調査、高校3年生相当の第 18 回調査、大学、専門学校・各種学校の1年生相当の第 19 回調査、大学4年生相当の第 22 回調査の通学・就業状況の変化を確認した。通学・就業状況は、「通学している」、「就業している」、「通学も就業もしていない」、「その他」の4つに分類をしたが、各調査回における回答選択肢の振り分けは図表 2-5-1 のとおりである。

図表 2-5-1 通学・就業状況の変化の分類

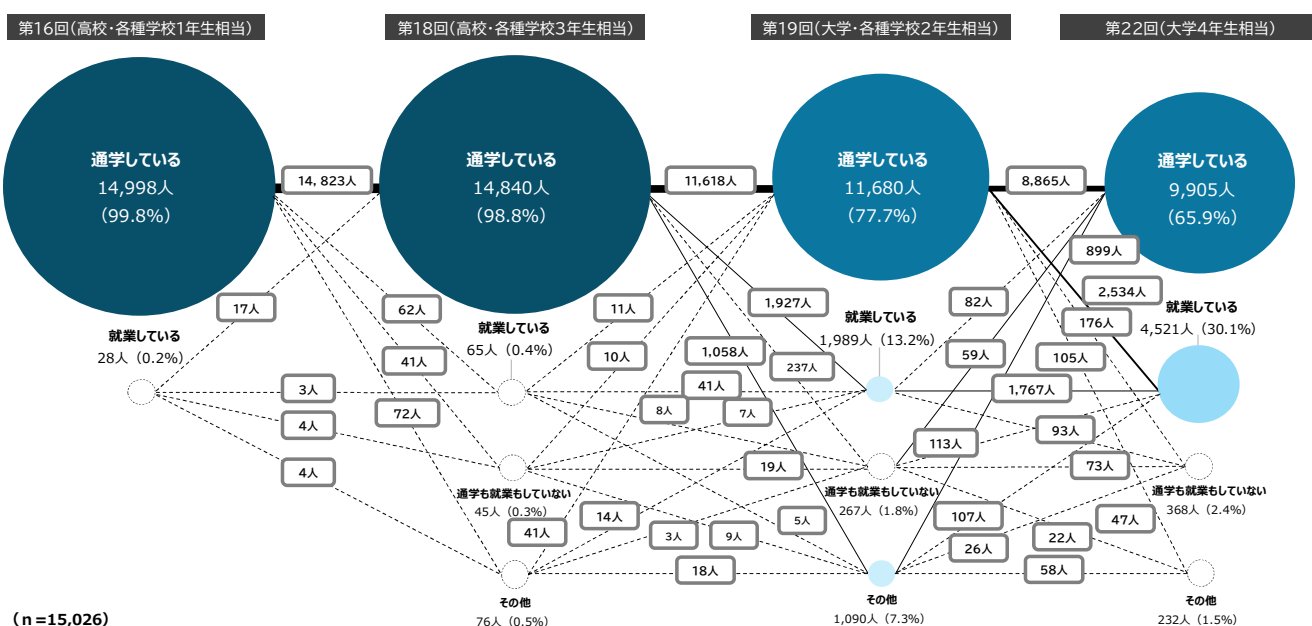
分類項目	第 16 回 問 15 の 回答選択肢	第 18 回、19 回 問9の 回答選択肢	第 22 回 問 10 の 回答選択肢
通学している	「主に通学している」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」	「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」	「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」
就業している	「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」	「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」	「就業(常勤の仕事)している」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」
通学も就業も していない	「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」	「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」	「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で 訓練している」
その他	「その他」	「その他」	「その他」

なお、ここでの集計は第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査の「通学・就業状況」の問いのいずれにも回答があった回答者に限った集計結果である。

①全体

通学している人は第16回調査時点で99.8%、第18回調査時点で98.8%と10割近くとなっている。第19回調査時点では77.7%、第22回調査時点では65.9%となっている。就業している人は第16回調査時点では0.2%(28人)だが、徐々に増加し、第22回調査時点で30.1%となっている。通学も就業もしていない人は第16回調査時点では0.0%(0人)だが、徐々に増加し、第22回調査時点で2.4%(368人)となっている。

図表 2-5-2 通学・就業状況の変化(第16回、第18回、第19回、第22回調査)



②通学も就業もしていない状況が継続している人の実態

前述のとおり、第 16 回調査時点で通学も就業もしていない人は 0.0%(0 人)となっているが、第 18 回調査以降は、一定数、通学も就業もしていない人がある。そこで、サンプル数が少ないため、参考での掲載とはなるが、第 18 回調査、または、第 19 回調査時点で「通学も就業もしていない」状況になり、その後の第 22 回調査においても「通学も就業もしていない」状況が継続している回答者の中学3年生時点の状況や第 16 回調査時点(高校1年生相当)の状況を確認した。なお、この状況を確認するため、「その他の人」(「通学も就業もしていない」状況が継続していない人)と比較を行っている。

通学も就業もしていない状況が継続している人が第 16 回調査時点で通っている学校は「高等学校」が 60.3%で最も多いが、その他の人と比較すると少ない傾向にある。通学も就業もしていない状況が継続している人は、次いで「特別支援学校」が 32.9%と多くなっており、その他の人と比較すると多い傾向にある。

通学も就業もしていない状況が継続している人の第 16 回調査時点での進路選択の満足度は「満足」が 32.9%、「どちらかといえば満足」が 41.1%と多くなっているが、その他の人と比較すると少ない傾向にある。通学も就業もしていない状況が継続している人は「どちらかといえば不満」が 13.7%となっており、その他の人と比較すると多い傾向にある。

通学も就業もしていない状況が継続している人の中学3年生の時の成績は、「下の方」が 45.2%と最も多く、その他の人と比較すると多い傾向にある。

図表 2-5-3 第 16 回調査時点で通っている学校

	高等学校	高等専門学校	特別支援学校	専修学校・各種学校	上段:件数、下段:%	
					その他	無回答
通学も就業もしていない状況が継続している人(n=73)	44 60.3	1 1.4	24 32.9	1 1.4	- -	3 4.1
その他の人(n=14,953)	14,251 95.3	306 2.0	188 1.3	60 0.4	41 0	107 0.7

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-5-4 第 16 回調査時点の進路選択の満足度

	上段:件数、下段:%				
	満 足	満 ど ち ら か と い え ば	不 満 ど ち ら か と い え ば	不 満	無 回 答
通学も就業もしていない状況が 継続している人(n=73)	24 32.9	30 41.1	10 13.7	3 4.1	6 8.2
その他の人(n=14,953)	6,219 41.6	6,774 45.3	1,423 9.5	345 2.3	192 1.3

カイ二乗検定:p<0.001

図表 2-5-5 中学3年生の時の成績

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	やや 上 の 方	真 ん 中 あ た り	やや 下 の 方	下 の 方	無 回 答
通学も就業もしていない状況が 継続している人(n=73)	1 1.4	9 12.3	14 19.2	11 15.1	33 45.2	5 6.8
その他の人(n=14,953)	2,911 19.5	4,075 27.3	4,089 27.3	2,385 15.9	1,362 9.1	131 0.9

カイ二乗検定:p<0.001

(2)第 15 回調査時点の進路意向別にみた通学・就業状況の変化

本項では、高校3年生相当の第 18 回調査、大学、専門学校・各種学校の2年生相当の第 20 回調査、大学4年生相当の第 22 回調査の通学就業状況の変化を第 15 回調査時点の進路意向別で確認した。通学・就業状況は、「通学している<高等学校／大学>」、「通学している<専修学校・各種学校>」、「通学している<特別支援学校・その他／その他>」、「就業している」、「通学も就業もしていない」、「その他」の6つに分類をしたが、各調査回における回答選択肢の振り分けは図表 2-5-6 のとおりである。

図表 2-5-6 通学・就業状況の変化の分類

分類項目	第 18 回 問 15、16②の 回答選択肢	第 20 回 問 8、9②の 回答選択肢	第 22 回 問 10、11②の 回答選択肢
通学している ＜高等学校＞ ＜大学＞	【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「高等学校(中等教育学校後期課程を含みます)」	【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「大学」 「短期大学」	【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「大学」 「短期大学」
通学している ＜専修学校・各種学校＞	【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「高等専門学校」 「専修学校・各種学校」	【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「高等専門学校(5 年制)」 「専修学校・各種学校」	【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「高等専門学校(5 年制)」 「専修学校・各種学校」
通学している ＜特別支援学校・その他＞ ＜その他＞	【問 15】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 16②】 「特別支援学校」 「その他」	【問 8】 「通学していて、働いていない」 「通学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「通学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 9②】 「その他」	【問 10】 「在学していて、働いていない」 「在学しながら、パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」 「在学しながら、就業(常勤の仕事)をしている」 【問 11②】 「その他」
就業している	【問 15】 「就業(常勤の仕事)をしている」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」	【問 8】 「就業(常勤の仕事)をしている」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」	【問 10】 「就業(常勤の仕事)をしている」 「パート・アルバイト(非常勤の仕事)をしている」
通学も就業もしていない	【問 15】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で訓練している」	【問 8】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で訓練している」	【問 10】 「就業していない」 「公共職業能力開発施設等で訓練している」
その他	【問 15】 「その他」	【問 8】 「その他」	【問 10】 「その他」

なお、ここでの集計は第 18 回、第 20 回、第 22 回調査の「通学・就業状況」の問い、第 15 回調査の進路意向の問いのいずれにも回答があった回答者に限った集計結果である。

①全体

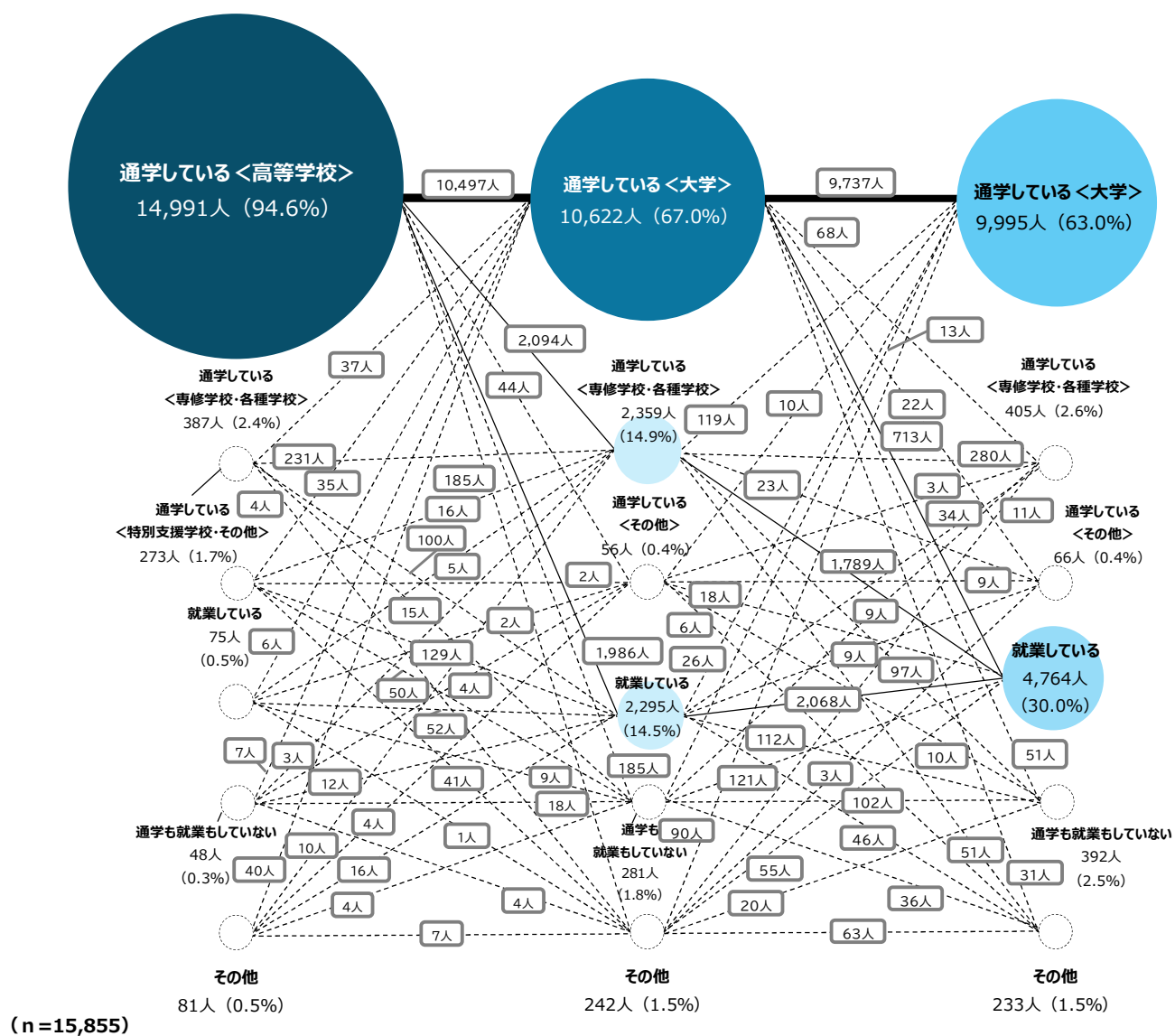
全体の変化をみると、第 18 回調査時点で高等学校に通学している人は 94.6%となっている。その後、大学に通学している人は第 20 回調査時点では 67.0%、第 22 回調査時点では 63.0%となっている。専修学校・各種学校に通学している人は第 18 回調査時点では 2.4%となっているが、第 20 回調査時点では 14.9%となっている。第 22 回調査時点では 2.6%となっている。就業している人は第 18 回調査時点では 0.5%となっているが、徐々に増加し、第 20 回調査時点では 14.5%、第 22 回調査時点では 30.0%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回調査時点では 0.3%(48 人)となっているが、徐々に増加し、第 20 回調査時点では 1.8%(281 人)、第 22 回調査時点では 2.5%(392 人)となっている。

図表 2-5-7 通学・就業状況の変化(全体)

第18回(高校・各種学校3年生相当)

第20回(大学・各種学校2年生相当)

第22回(大学4年生相当)

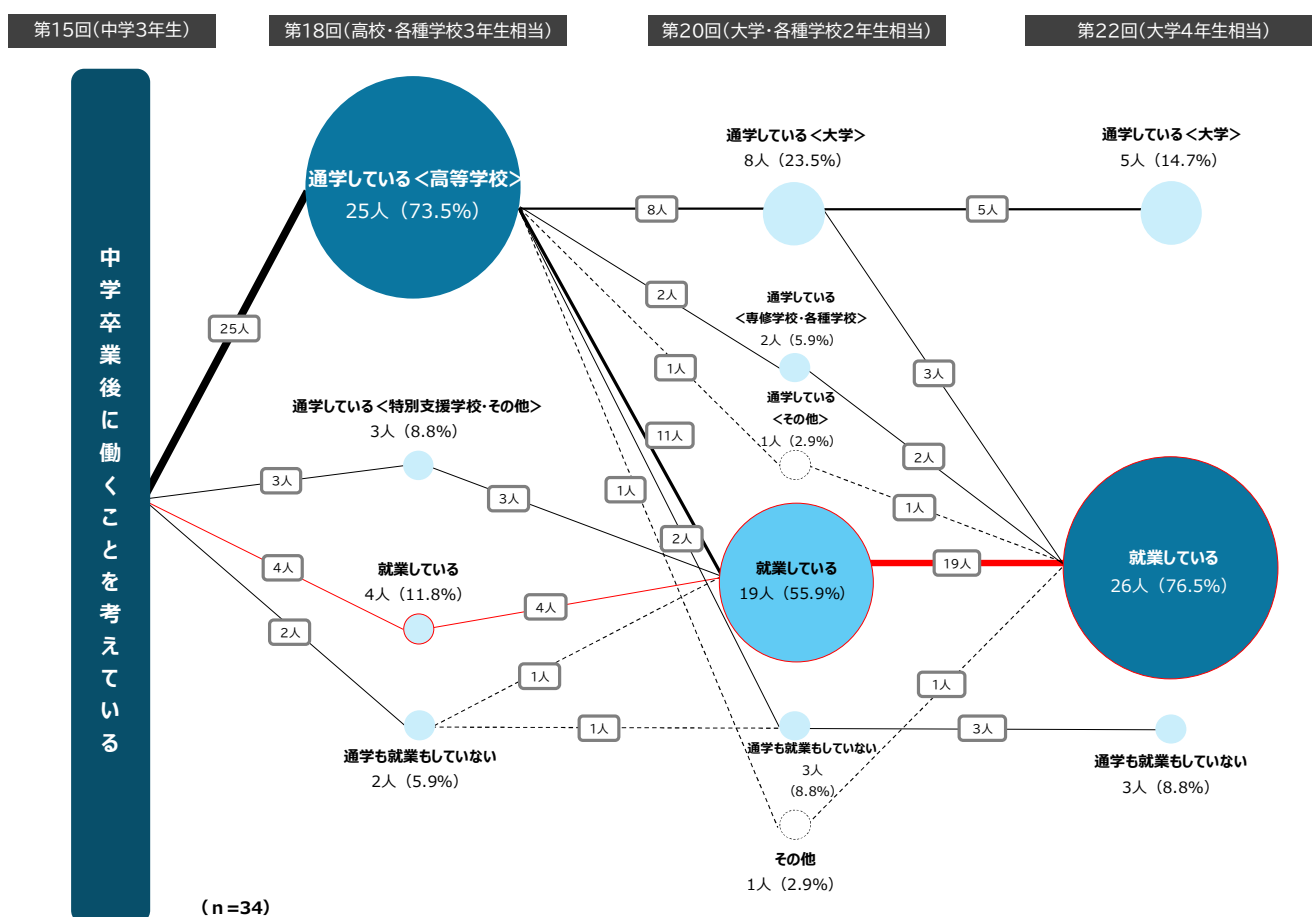


②第15回調査時点で中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

サンプル数が少ないため、参考値となるが、第15回調査時点で中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第18回調査時点では高等学校に通学している人が73.5%となっている。第20回調査時点になると就業している人が55.9%(19人)となり、第22回調査時点になると76.5%(26人)となっている。通学も就業もしていない人は第18回調査時点では5.9%(2人)となっており、第20回、第22回調査時点では8.8%(3人)となっている。

なお、第15回調査時点の進路意向どおりの進路選択をした回答者は11.8%(4人)となっている。

図表 2-5-8 第15回調査時点で全体中学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

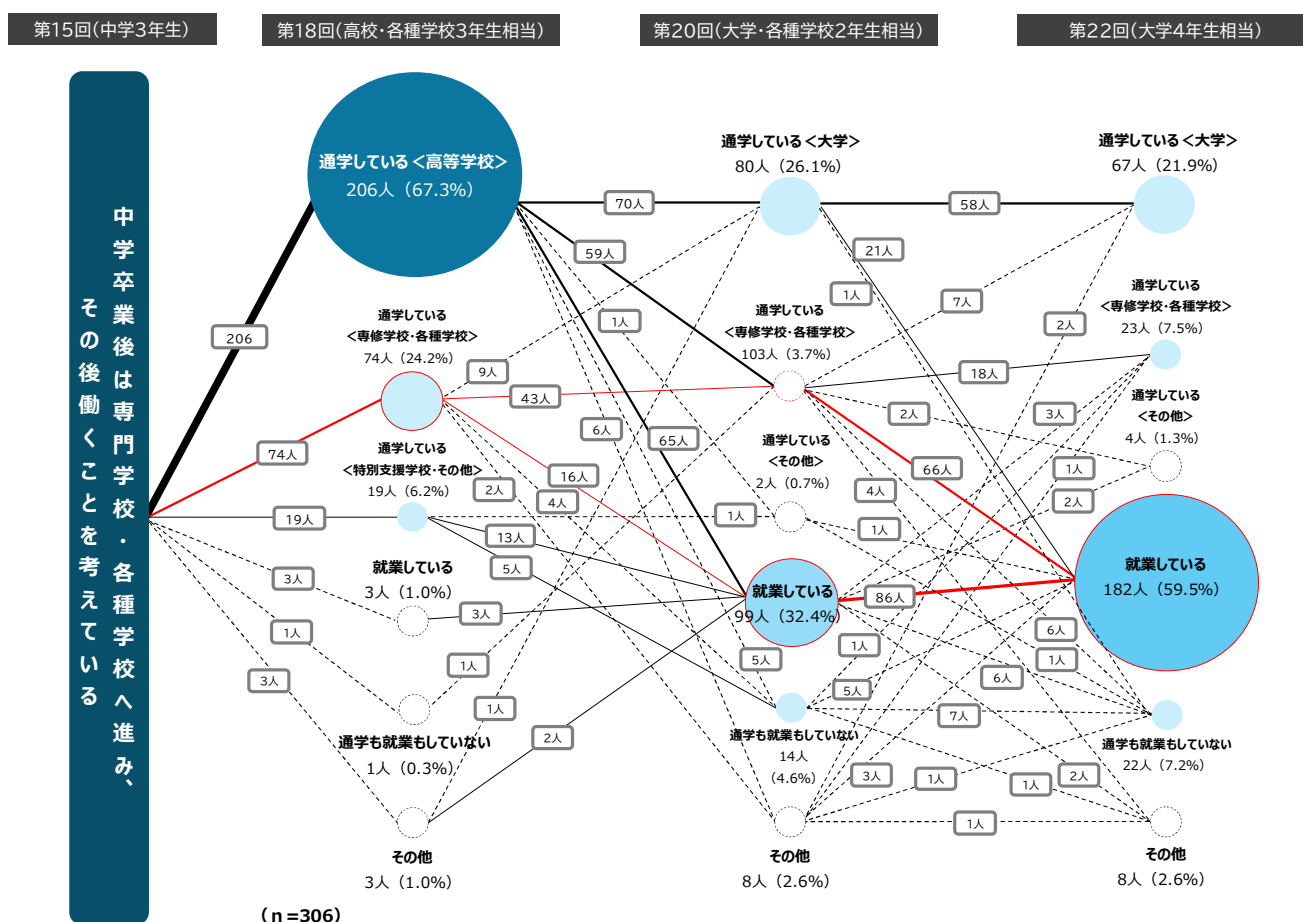


③第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回調査時点で高等学校に通学している人は 67.3%となっており、専修学校・各種学校に通学している人は 24.2%となっている。第 20 回調査時点で大学に通学している人は 26.1%となっており、就業している人が 32.4%となっている。第 22 回調査時点では就業している人が 59.5%となっており、大学に通学している人は 21.9%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回調査時点では 0.3%(1 人)となっているが、第 20 回調査時点では 4.6%(14 人)、第 22 回調査時点では 7.2%(22 人)となっている。

なお、第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 10.5%(32 人)となっている。

図表 2-5-9 第 15 回調査時点で中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

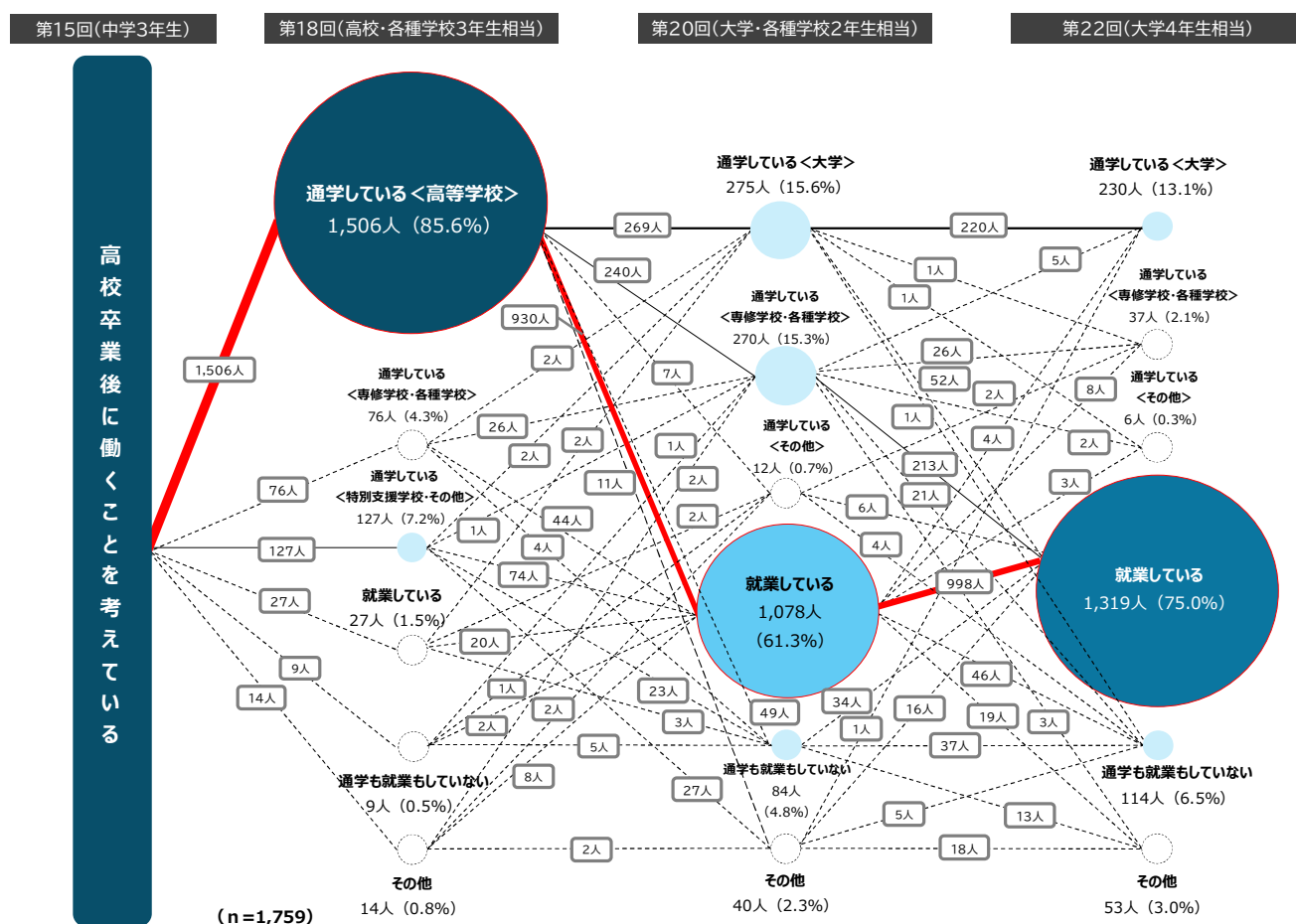


④第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回調査時点で高等学校に通学している人は 85.6%となっている。第 20 回調査時点では就業している人が 61.3%となっており、大学に通学している人は 15.6%、専修学校・各種学校に通学している人は 15.3%となっている。第 22 回調査時点では就業している人が 75.0%となっており、大学に通学している人は 13.1%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回調査時点では 0.5%(9人)となっているが、第 20 回調査時点では 4.8%(84 人)、第 22 回調査時点では 6.5%(114 人)となっている。

なお、第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 49.3%(867 人)となっている。

図表 2-5-10 第 15 回調査時点で高校卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

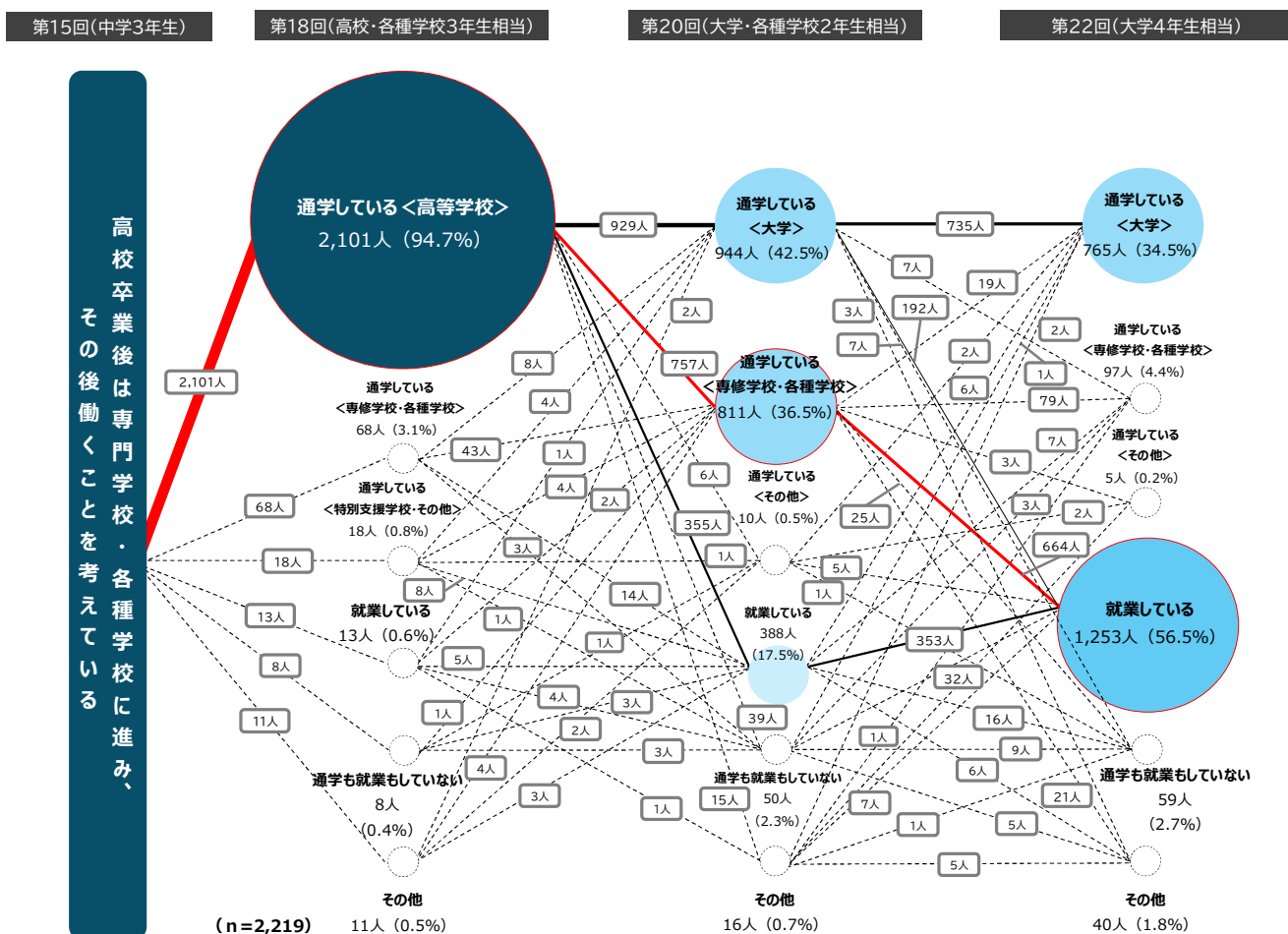


⑤第 15 回調査時点で高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回調査時点で高等学校に通学している人は 94.7%となっている。第 20 回調査時点では大学に通学している人が 42.5%となっており、専修学校・各種学校に通学している人が 36.5%となっている。第 22 回調査時点では就業している人が 56.5%となっており、大学に通学している人は 34.5%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回調査時点では 0.4%(8人)となっているが、第 20 回調査時点では 2.3%(50 人)、第 22 回調査時点では 2.7%(59 人)となっている。

なお、第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路選択をした回答者は 28.2%(626 人)となっている。

図表 2-5-11 第 15 回調査時点で高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

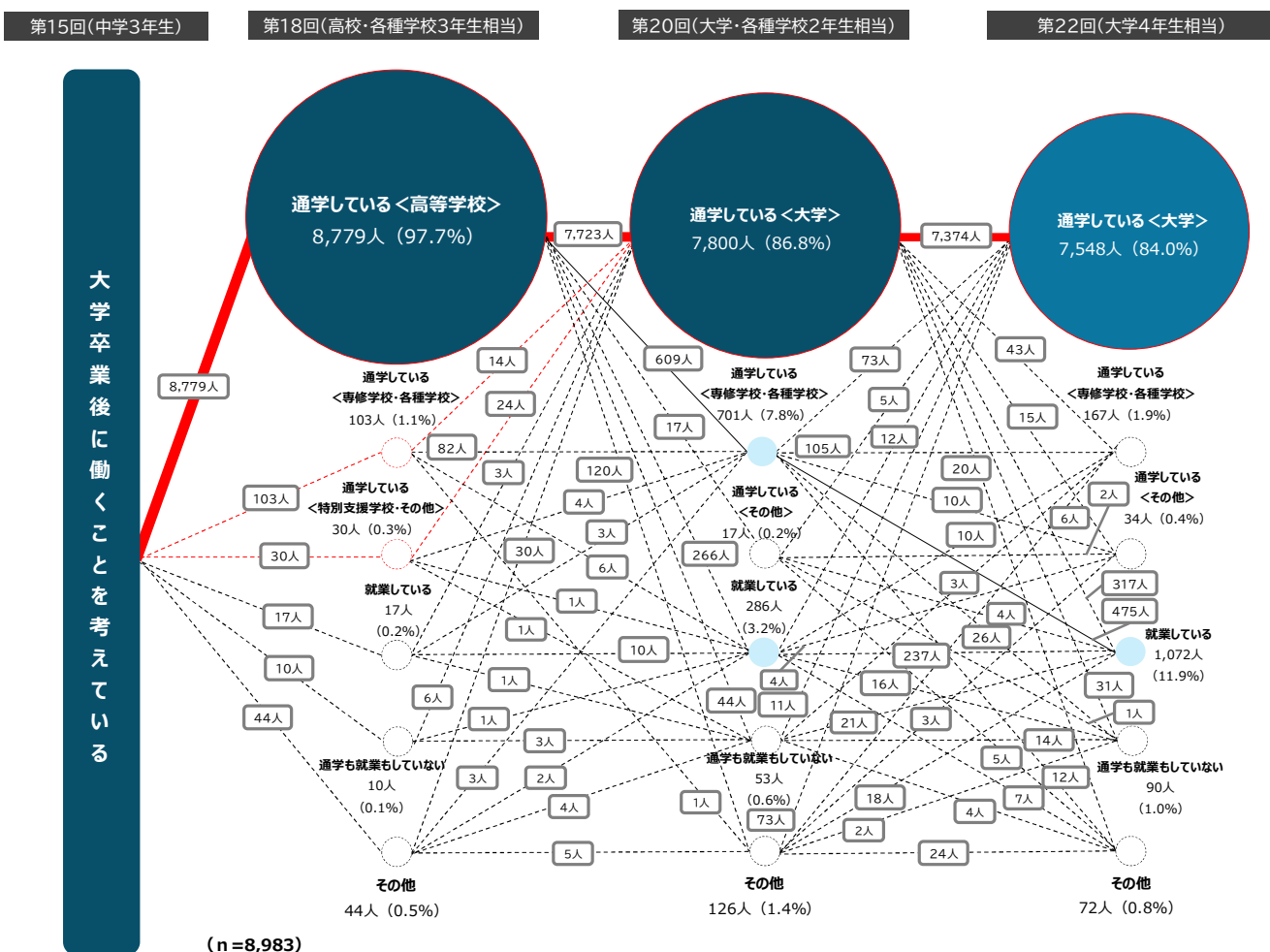


⑥第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化

第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化をみると、第18回調査時点で高等学校に通学している人は97.7%となっている。第20回調査時点では大学に通学している人が86.8%となっており、第22回調査時点で大学に通学している人は84.0%となっている。通学も就業もしていない人は第18回調査時点では0.1%(10人)となっているが、第20回調査時点では0.6%(53人)、第22回調査時点では1.0%(90人)となっている。

なお、第15回調査時点の進路意向どおりの進路選択をした回答者は81.7%(7,337人)となっている。

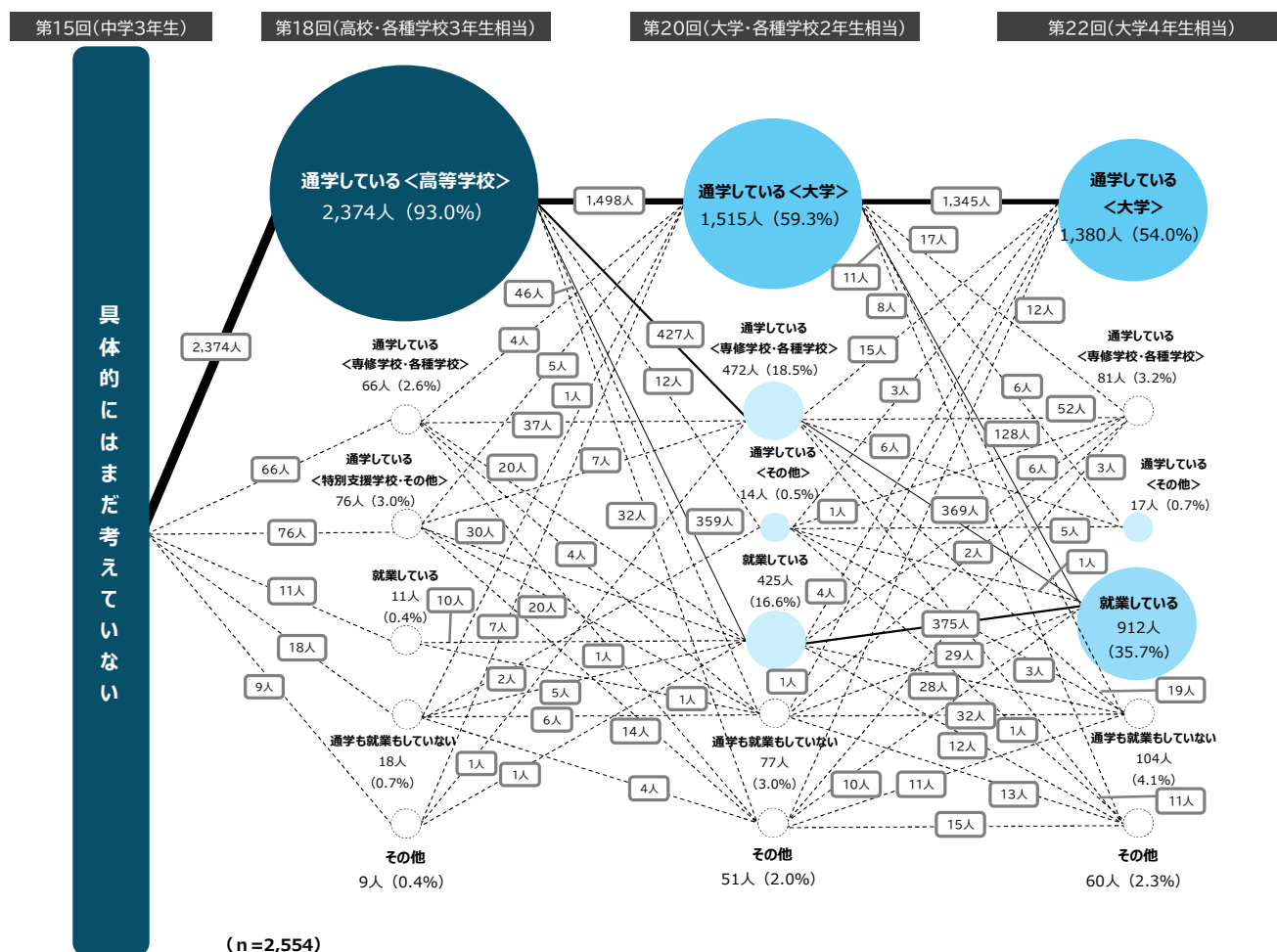
図表 2-5-12 第15回調査時点で大学卒業後に働くことを考えていた人の通学・就業状況の変化



⑦第 15 回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化

第 15 回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化をみると、第 18 回調査時点で高等学校に通学している人は 93.0%となっている。第 20 回調査時点では大学に通学している人が 59.3%となっており、専修学校・各種学校に通学している人が 18.5%、就業している人が 16.6%となっている。第 22 回調査時点では大学に通学している人が 54.0%となっており、就業している人が 35.7%となっている。通学も就業もしていない人は第 18 回調査時点では 0.7%(18 人)となっているが、第 20 回調査時点では 3.0%(77 人)、第 22 回調査時点では 4.1%(104 人)となっている。

図表 2-5-13 第 15 回調査時点で具体的には進路を考えていなかった人の通学・就業状況の変化



⑧第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の実態

第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人は、前述のとおり、中学卒業後に働くことを考えていた人で 11.8%(4 人)、中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人で 10.5%(32 人)、高校卒業後に働くことを考えていた人で 49.3%(867 人)、高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人で 28.2%(626 人)、大学卒業後に働くことを考えていた人で 81.7%(7,337 人)となっていた。第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択することが必ずしもよいということではないが、それぞれ進路意向どおりの進路を選択した人の実態を確認した。なお、この実態を確認するため、「進路意向どおりの進路を選択していない人」と比較を行っている。

ア. 第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績(第 16 回調査)

第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績の自己評価は、大学卒業後に働くことを考えていた人で「やや上のほう」が 34.6%、「上の方」が 32.4%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較すると多い傾向にある。高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えていた人は「真ん中あたり」が 39.3%、「やや下の方」が 26.4%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。高校卒業後に働くことを考えていた人は「やや下のほう」が 33.7%、「真ん中あたり」が 31.5%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えていた人は「下の方」が 43.8%となっており、進路意向どおりの進路を選択していない人と比較するとやや多い傾向にある。

図表 2-5-14 第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績
(第 16 回調査)

中学卒業後に働くことを考えている

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	や や 上 の 方	真 ん 中 あ た り	や や 下 の 方	下 の 方	無 回 答
進路意向どおりの進路を選択した人(n=4)	- -	- -	- -	- -	4 100.0	- -
進路意向どおりの進路を選択していない人 (n=30)	- -	2 6.7	11 36.7	10 33.3	7 23.3	- -

カイニ乗検定: $p > 0.05$ (ns)

中学卒業後は専門学校・各種学校へ進み、その後働くことを考えている

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	や や 上 の 方	真 ん 中 あ た り	や や 下 の 方	下 の 方	無 回 答
進路意向どおりの進路を選択した人(n=32)	5 15.6	9 28.1	1 3.1	2 6.3	14 43.8	1 3.1
進路意向どおりの進路を選択していない人 (n=274)	31 11.3	37 13.5	79 28.8	69 25.2	53 19.3	5 1.8

カイニ乗検定: $p < 0.001$

高校卒業後に働くことを考えている

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	や や 上 の 方	真 ん 中 あ た り	や や 下 の 方	下 の 方	無 回 答
進路意向どおりの進路を選択した人 (n=867)	14 1.6	93 10.7	273 31.5	292 33.7	189 21.8	6 0.7
進路意向どおりの進路を選択していない人 (n=892)	39 4.4	127 14.2	236 26.5	231 25.9	231 25.9	28 3.1

カイニ乗検定: $p < 0.001$

図表 2-5-14 第 15 回調査時点の進路意向どおりの進路を選択した人の中学校 3 年生の時の成績
(第 16 回調査)(続き)

高校卒業後は専門学校・各種学校に進み、その後働くことを考えている

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	やや 上 の 方	真 ん 中 あ た り	やや 下 の 方	下 の 方	無 回 答
進路意向どおりの進路を選択した人 (n=626)	21 3.4	122 19.5	246 39.3	165 26.4	69 11.0	3 0.5
進路意向どおりの進路を選択していない人 (n=1,593)	131 8.2	369 23.2	541 34.0	371 23.3	168 10.5	13 0.8

カイニ乗検定: $p<0.001$

大学卒業後に働くことを考えている

	上段:件数、下段:%					
	上 の 方	やや 上 の 方	真 ん 中 あ た り	やや 下 の 方	下 の 方	無 回 答
進路意向どおりの進路を選択した人 (n=7,337)	2377 32.4	2539 34.6	1622 22.1	564 7.7	197 2.7	38 0.5
進路意向どおりの進路を選択していない人 (n=1,646)	240 14.6	432 26.2	532 32.3	309 18.8	116 7.0	17 1.0

カイニ乗検定: $p<0.001$

(3)小括

調査回答者の変化に関する分析では、第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 22 回調査時点の通学・就業状況の変化を確認するとともに、通学も就業もしていない状況が継続している人の実態を分析した。また、第 15 回調査時点の進路意向別で第 18 回、第 20 回、第 22 回調査の通学・就業状況の変化も分析した。

今後は、一度通学も就業もしていない状況になったものの、その後、通学・就業した人の分析や、進路意向どおりの進路を選択した人の分析を行うなど、調査回答者の変化に関する分析をより深めていくことが、今後の教育政策の立案に資する上で重要と考える。

Ⅲ 平成 22 年出生児縦断調査の実施を見据えた調査項目等の検討

1. 検討・実施事項の概要

浜銀総合研究所(2022)¹¹では、平成 13 年児縦断調査について「この調査は、厚労省実施の調査を対象者が高校生になってから文部科学省が引き継いだという経緯から、主に個人(家庭)の選択の結果を追跡する形になっており、学校等の場で「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」に関してはほとんど情報が得られていない。そのため、政策(特に、政府の介入が直接的に表れやすい小中学校)の効果を解明するという機能を果たすことが難しいという限界がある。」と問題を提起した上で、「ただし、「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」について回顧的に回答する調査項目を盛り込むことで、より教育政策立案に活用できる可能性がある。」としている。さらに、「平成 22 年児縦断調査は、平成 13 年児縦断調査とほぼ同じ内容の調査を、別のコーホートを追跡する形で実施されている調査である。平成 13 年児縦断調査と比較をし、同一の調査項目により、約 10 年間の変化が把握可能であるという点で、データとしての価値が高い。平成 22 年児縦断調査は令和 3 年度現在、厚生労働省により実施されているが、今後の調査回において教育政策に関連するような調査項目を盛り込むことや、平成 13 年児縦断調査と同様に「どのような学校でどのような教育を受けたか(学校でどのような経験をしたか)」について回顧的に回答する調査項目を盛り込むことで、より教育政策立案等に活用できる可能性があると考えられた。」との提案を行っている。

これを受けて、浜銀総合研究所(2023)¹²では、ウェルビーイングに関する施策の検討・立案に資する分析が可能と考えられる調査項目や、学校卒業後も含めた子供の成長過程の解明に資する分析が可能と考えられる新規項目についての検討の一環として、「回顧的に状況把握を行うことを想定した項目検討」を行うとともに、「回顧的に状況把握を行うことを想定した項目検討」で検討した調査項目等が実際に分析に資するか、有意義となるかについて「予備調査」を行うことを想定し、調査項目の有意義性を測定するにあたり必要となる予備調査対象者の標本数やその抽出方法、調査項目数を含め、どのような調査分析が可能かの提案を行っている。

¹¹ 浜銀総合研究所(2022)「令和3年度「EBPMをはじめとした統計改革を推進するための調査研究」 21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)における調査データを活用した詳細分析等に資する調査研究」(令和4年3月)

¹² 浜銀総合研究所(2023)「令和4年度「EBPMをはじめとした統計改革を推進するための調査研究」 子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析」(令和5年3月)

浜銀総合研究所(2024)¹³ においては、回顧的な調査項目に関する予備調査「若者の生活や意識に関する調査」を実施し、「特に主語が自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなっていると考えられることから、回顧法での設問設定にあたってはこれらのような点に留意を要する」、学校をやめた経験について「あらためてすべての調査対象者に対して回顧的に尋ねる項目を設定することで、学校をやめた経験(中退した経験)をより実態に近い形で把握できる可能性がある」、逆境体験について「家庭内で親・自分自身に起きた逆境的な経験の有無や内容について把握する項目を設定することは、分析を行う上で有用になるのではないかと考えられる」、「いじめの経験や不登校経験については21世紀出生児縦断調査ではこれまでに状況把握ができる項目設定がされていない。回顧的な形でこれらの経験の有無について把握する項目を設定することは、分析を行う上で有用になるのではないかと考えられる」等の考察を行っている。

本調査研究では、以上のような回顧的な調査項目に関する検討や予備調査の結果を踏まえ、先行研究や他の公的調査の実施状況を概観し、第16回調査以降の調査項目に回顧的な項目をどのように扱うべきか、特に、回顧期間として適切な範囲はどのようなものか、またそれを受けて今後回顧項目をどのように配分していくのがよいかという問題意識をベースに、回顧的項目の利点や課題、実施上考慮すべき事項を有識者からの意見を含め検討した。

2. 調査方法

本項では、第16回調査以降の調査項目に回顧的な項目をどのように扱うべきかを検討するため、文献調査を行った。文献検索には、CiNii Research、Google Scholar、J-STAGE を用いて、回顧的な調査に関する論文について網羅的に検索を行った。

検索式には、「回顧」、「調査」、回顧的な調査が有用とされている「逆境体験」等を組み合わせて使用した。検索は2024年9月から12月にかけて行い、検索する論文は日本語で執筆されたものを対象とした。論文の検索は2名で行い、本項に組み込むべき論文の精査は3名で行った。その結果、回顧的な調査項目の検討に資すると判断した文献は、「V 参考資料」のとおりである。

また、本調査研究は、I 2.「(3)有識者に対するヒアリング」に記載のとおり、有識者の助言を受けなが

¹³ 浜銀総合研究所(2024)「令和5年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善を提案するための取組」子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析」(令和6年3月)

ら作成している。本項の回顧的な調査項目の検討についても、文献調査結果を有識者に照会し、助言を受けているため、本項には、「有識者の意見」としてその助言を掲載している。

3. 調査結果

(1) 回顧期間に関する分析

アドホックで実施される多くの調査において回顧的な項目は散見されるが、今回参考にした文献からはその期間の適切性そのものについて研究した文献、回顧期間の設定根拠に関する言及は確認できなかった。この点について有識者からは、「そもそも『期間』についての根拠を求めることに無理がある」、「そこに正解はない」、「期間の問題については、正確性の検証は不可能なので研究もないだろう」という意見が多数を占めていた。

回顧期間について、今回取り上げた文献(9件)、類似調査例(8 例)からみると、回顧的な調査を行っている事例としては、過去の特定の時点を指定した回顧的な調査項目は 89 項目、過去の経験全体を指定した回顧的な調査項目は 91 項目であった。過去の特定の時点を指定した回顧的な調査項目の詳細をみると、調査対象者が 20 歳以上になってから子供のころのことを尋ねている問いが多く、11～20 年前のことを尋ねている調査項目が 56 項目あった。

図表 3-3-1 回顧的な調査項目の分類結果(事例:8調査)

- | |
|--------------------------|
| ・過去の特定の時点を指定した調査項目:89 項目 |
| ～5年前:11 項目 |
| 6～10 年前:32 項目 |
| 11～20 年前:56 項目 |
| 21 年以上前:9項目 |
| ※重複分類あり |
| ・過去の経験全体を指定した調査項目:91 項目 |

資料:参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

回顧期間の設定については解を得られなかったが、別の「期間」の考えとして、有識者からは以下の提言があった。

図表 3-3-2 有識者の意見

・同じ事象に対して、1 年経過、5 年経過、10 年経過などの時点で聞いたときに違いはあるのか、変化は生じるかという観点、いじめ体験がネガティブな捉え方から回復していく過程や逆境そのものとそれを乗り越える過程、変化という意味での「期間」(時間)そのものを捉えることには意味がある。そのためには経年的に聞く必要がある。期間を決めてというものではない。
・逆境体験については、同一項目の 5 年後の回答、さらにその数年後の回答を比較することで信頼性を見る方法もある(数年で大きく変わるようならば信頼性は低い)。

(2)回顧的設問内容について

今回の文献調査では参考資料を取り扱った。その回顧的な調査に関する言及は以下の通りである。

幼少期の経験がその後の発達や進路選択に与える長期的影響については、様々な形で論じられており、このテーマに関する関心の高さがうかがえる。

例えば、思春期女子の友人関係が自我発達に及ぼす影響、青年期における劣等感の発達的变化、思春期におけるいじめが及ぼす長期的な影響、学齢期のスポーツ参加と成人期のスポーツ参与の関連、児童生徒の道徳性形成要因など、幼少期からの様々な経験が長期的な発達に影響を与える可能性についての研究は様々な形で行われており、これらの研究テーマも今後の 21 世紀出生児縦断調査の切り口として検討し得るものといえる。

図表 3-3-3 回顧的な調査の扱い及びその考察についてのまとめ

文献名等	年	回顧的な調査に関する言及
若者の生活や意識に関する調査分析 1 ※子どもの成長過程を解明するための長期的な縦断調査に関する調査分析(令和5年度)内「予備調査」詳細	2024	・「わからない・覚えていない」の回答割合が特に高くなる項目もある。特に主語が自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなっていると考えられることから、回顧法での設問設定にあたってはこれらのような点に留意を要する。
2 前思春期女子のchum形成が自我発達に及ぼす影響～展望法と回顧法を用いて～	1997	・中年期から回顧した前思春期のchumの有無と青年期の自我発達上の危機状態との関連については有意な相関はないが、小学生を対象とした展望法に基づく相関値や、高校生を対象とした回顧法に基づく相関値では有意な結果が示されている。この矛盾について、中年期の被験者を対象として前思春期と青年期の2つの時期を回顧させているために時間経過上の諸要因が結果に介入しているのではないかととらえられる。長い時間を経た後の回顧法結果の信頼性の問題が考えられる。
3 学校のいじめに関する最近の研究動向——国内の実証的研究から カウンセリング研究, 31, 190–201.	1998	児童期及び青年期前期のいじめ被害体験に関する部分については回顧的方法によりデータ収集を行っている。諸変数間の関係を検討するには縦断的方法を用いるべきだが、今回敢えて回顧的方法を用いる理由は以下の通りである(神村・向井, 1998)。①羞恥心や恐れ, 社会的望ましさなどの影響を最小限に見積もることができる, ②いじめを経験した際の物理的・心理的状況を, むしろ客観的かつ冷静にふりかえる余裕がある中での正直で率直な反応が得られやすい, ③多感な小・中学生に直接回答を求めることにより, 彼らの学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けることができる, ④いじめの収束のプロセスや, いじめの経験がその後の心理的諸変数に及ぼす影響などをあわせて測定することができる。
4 回顧法による青年期における劣等感の発達的变化	2007	・回顧法を用いることで、対象学校間・地域間の学業水準や経済水準を一定に保ち、対象集団の学業水準・経済水準を考慮した発達的变化を把握できると考える。 ・回顧順による順序効果の影響を低減させるため、中学生時・高校生時・現在の順で回答するパターンと、現在・高校生時・中学生時の順で回答するパターンの2パターンを作成し、ランダムに配布した。
5 世帯所得と子どもの学歴—前向き分析と後向き分析の比較—	2015	・親学歴は調査で無回答がやや多いとはいえ、変化することはほとんどなく新制であれば区分も少ないので、かなり正確に測定できる変数である。他方で経済的な背景については、調査対象者の定位家族の所得や(可能であれば資産)を知る必要があるが、これを正確に測定するのはきわめて難しい。成人を対象とするクロスセクショナルな調査で、「あなたが大学に進学したころの親の所得を教えてください」と回顧的に尋ねてみても、正確に答えられる対象者はほとんどいないからである。
6 学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ参加の関連～回顧的データに基づく持ち越し効果の検討～	2017	・本研究の限界点として、回顧的な調査であることが挙げられる。本来的にスポーツへの親和性の高い者が組織的スポーツの参加を継続している可能性も否定できず、因果関係について結論付けることはできない。引き続き、縦断的な研究デザインなどを用いた検証が求められる。また、過去の経験については思い出しバイアスがあることがしてきされている。しかし、感情などの想起と比較して、実際に自身が行っていた行動については誤差が生じにくいと考えられ、特に参加していたかどうかの区別はより明確であると推察される。

文献名等	年	回顧的な調査に関する言及
7 回顧式家族調査 NFRJ-16R のねらいと経過	2017	問題点 ・記憶の正確な想起に関わる問題である。現在の状況をその都度回答してもらうパネル調査に比して、過去の記憶を想起して回答してもらうことは困難が伴う。また、回答が得られた場合も、経年の中でその記憶が歪められていることも懸念される。 ・もう一つは、1回の調査で回答を求める事項の数が膨大になる。回顧調査は、複数回のパネル調査で尋ねる事柄を一度の調査で尋ねるわけであるから、そのまま考えれば回答者に甚大な負担を強いることになる。表面的な問題で言えば、回収率が低くなることが懸念される。
8 児童生徒の道徳性形成要因に関する予備的研究～大学生を対象とした回顧的調査の結果～	2019	自由記述式の回顧録的調査は、5件法などを用いた本格的な調査ではない半面、大学生が各々の子ども事態を振り返りながら、影響を受けた人物・環境・体験の内容などを主観的かつ自由に記述できるという点において、よりリアルな道徳性形成要因と道徳性形成の実態に迫る可能性を有しているものと思われる。
9 思春期における無視、仲間はずれ、陰口はなぜ生じるのか？～中学生における関係性攻撃動機の質的検討および動機と加害立場・侵害意図との関連～	2023	・中学生では内省力や動機を言語化する能力において発達的に限界があると考えられたため、中学生の動機を補完して把握することを目的に、大学生においても回顧式の調査を実施した。

資料：参考資料を基に株式会社サベイリサーチセンターが作成

①回顧的項目の利用と懸念事項

回顧的項目の利用には、「不正確さ」を中心として以下のような懸念事項が存在する一方、現象から時間が経過することでより客観的な事実として把握し得ることや、時間が経過することそのものの持つ意味などを肯定的にとらえるスタンスも示されている。回顧的項目は、どのような意図で、何を設定するかでその効果が変わってくるといえる。

図表 3-3-4 回顧的項目の懸念事項

記憶の不正確さ	時間経過とともに記憶が曖昧になったり、都合の良いように書き換えられたりする可能性がある。特に、自身以外のことを尋ねられている項目や、場面の想起が容易でない内容を尋ねられた場合に回答が難しくなる傾向がある。
主観的バイアスと結果の解釈の困難性	回顧的な質問では、対象者が過去の出来事を現在の状況や感情に影響されて解釈する可能性がある。またそのため、結果の解釈に困難を生じることも考えられる。
測定項目の妥当性	抽象的な概念や過去の状況を正確に測定できる項目を設定することが難しい場合がある。
回答者の負担	回顧的な調査項目を盛り込む場合、1回の調査で回答を求める事項の数が多くなる可能性があるため、回答者に大きな負担を強いることになる。そのため、回収率が低くなることが懸念される。

資料：参考資料を基に株式会社サベイリサーチセンターが作成

図表 3-3-5 回顧的項目を利用する利点

効率的なデータ収集	過去の出来事や経験を一度にまとめて調査できるため、効率的にデータを収集できる。
羞恥心や社会的望ましさの低減	いじめなどのセンシティブなテーマについても、時間経過により客観的に振り返ることができ、正直で率直な回答が得られやすい。
客観的な振り返りの促進	いじめを経験した際の物理的・心理的状況を、むしろ客観的かつ冷静に振り返る余裕がある中で回答が得られやすい。
リアルな実態把握の可能性	自由記述式の回顧録的調査は、影響を受けた人物・環境・体験の内容などを主観的かつ自由に記述できるため、よりリアルな実態に迫る可能性がある。
内省力・言語化能力の補完	小・中学生の内省力や言語化能力の発達のな限界を補完するために、より成長してから回顧的に調査を実施するといった活用方法もある。
行動に関する想起の正確性	過去の行動については、感情などの想起と比較して誤差が生じにくく、特に参加していたかどうかの区別はより明確であると考えられる。

資料：参考資料を基に株式会社サーベイリサーチセンターが作成

②行ってきた教育政策に関する項目の必要性

21 世紀出生児縦断調査が教育政策に資するものとしてより充実したものとなるには、その観点からの回顧項目も必要である。有識者からも「学校教育も関わってくる時期にあっても必要なものが聞けていないのでは」という懸念が示されており、誰もが体験する学習経験について回顧的に抑えておくことの必要性が示唆されている。

例えば、「学ぶ力」の取組をどう受けたか、学校の課程や、そこでどういう授業を受けてきたか、あるいは、クラスの生徒数、体験活動の状況など、多くの人を経験してきたものが必ずしも捉えられていない。それが大人になってどう発揮されたか、政策課題となってきたものについて、今後回顧的にでも捉えることで、教育政策に資する分析として、子どもの状況や学校を切り口にした分析が可能になる。

③事実項目と意識項目

回顧的項目の不確実性から、一般的には事実項目を中心とするのが良いとされ、有識者からもおおむねそのような意見となっていた。

一方、回顧的に聞くというのは、昔のことを今どう捉えているか、ということであり、今の意識を聞いている、それは回顧項目を入れる目的、使い方に関わる問題で、事実項目ならよくて意識的なものはだめとい

うことではない、という意見もあることを申し添えておく。

意識に関しても、「当時の意識」は不可だが回顧的意識としては可能であり、それが今に影響し、その人を形作っているもの、主観的事実だとしてもそれが大事なものならば検討の余地はある、良い思い出、楽しい思い出を持っているということが、現在のその人を作っているものであり、捉える意義はあるという意見である。

④いじめ・逆境体験など心理学的な視点からの項目

今回特にいじめや逆境体験を回顧的に取り扱うことについて参考にした文献(神村・向井 1998)の中では、いじめ被害体験に関する調査に回顧的方法を用いる理由として、の論文において以下の4点について言及されていた。

図表 3-3-6 いじめ被害体験に関する調査に回顧的方法を用いる理由

文献調査結果
①羞恥心や恐れ, 社会的望ましさなどの影響を最小限に見積もることができる
②いじめを経験した際の物理的・心理的状況を, むしろ客観的かつ冷静にふりかえる余裕がある中での正直で率直な反応が得られやすい
③多感な小・中学生に直接回答を求めることにより, 彼らの学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けることができる
④いじめの収束のプロセスや, いじめの経験がその後の心理的諸変数に及ぼす影響などをあわせて測定することができる

資料: 参考資料を基に株式会社サベイリサーチセンターが作成

また、直接的な回顧期間ではないが、いじめ被害体験を含む逆境的な体験に関する回顧的な調査を行っている事例(6調査)をみると、調査対象者が10歳代、20歳代の時点で18歳、または、現在までの経験を尋ねている問いが多く確認できた。

図表 3-3-7 いじめ・逆境体験に関する調査事例

事例収集結果(事例:6調査)
・逆境的体験に関する調査項目:29 項目 10 歳代時点→小学生のころの経験:1項目 10 歳代時点→18 歳までの経験:1項目 10 歳代時点→現在までの経験:3項目 18～29 歳時点→18 歳までの経験:1項目 18～29 歳時点→現在までの経験:50 項目 23～27 歳時点→18 歳までの経験:1項目 35～44 歳時点→15 歳～現在までの経験:4項目 ※小児期を含む調査項目を抜粋

資料:参考資料を基に株式会社サベイリサーチセンターが作成

なお、いじめ・逆境体験を回顧的に取り上げることについては有識者からも賛同が多い。センシティブな内容であることを前提としつつ、その扱いについては以下のような具体的な意見がみられた。

図表 3-3-8 いじめ・逆境体験に関する調査項目についての有識者の意見

・逆境体験については、同一項目の 5 年後の回答、さらにその数年後の回答を比較することで信頼性を見る方法もある。(数年で大きく変わるようならば信頼性は低い)
・いじめに関する項目として、学校の先生の関わりがどうだったかも示唆深いものなので同時に聞けると良い。
・いじめに関することは複雑なもの。加害と被害が入れ替わったり、連鎖したりする。質問するにもその辺の工夫が重要だ。
・SNSの発展の中で成長してきた世代なので、校内などで直接体験したものと、ネット上での体験と、両方を収集できると良い。
・逆境的な体験に関する調査項目は、その中身と時期をどう聞くのかが問題。聞けるのであれば「時期」「頻度」「程度」を聞けるとよいが、かなりセンシティブな項目なのでどこまで聞けるか。
・逆境体験に関しては幼少期のいじめ体験が将来の就業状況にまで影響しているという研究もある。時代を限定する方法(小学生のとき、中学生のとき、など)と、しない方法(今までに、と聞く方法)いずれもあるが、教育政策の観点からは全部、時期を特定して丁寧に聞いたほうがよい。
・ネガティブ要因(例:逆境体験)とポジティブ要因(例:読み聞かせ体験)の両方があり得る。どちらをより重視するか、政策としてどちらにアプローチするか次第だろう。
・ポジティブ要因も回顧的にでも丁寧にとらえる必要はある。例えば子どものころに本の読み聞かせをしてもらった経験など。(「子どものころ」と漠然としたものでもよい。)読み聞かせは親の教育的配慮、態度の 1 つの変数として有効だ。

資料:参考資料を基に株式会社サベイリサーチセンターが作成

4. 小括

参考にした文献の調査結果からみると、回顧期間の設定根拠に関する言及は確認ができなかったが、回顧的な調査を実施している事例から、調査対象者が 20 歳以上になってから子供のころのことを尋ねている問が多い傾向にあることが確認できた。

心理学的視点から回顧的な調査項目に関して述べている文献を確認したところ、いじめ被害体験に関する問いについて、回顧的方法を用いる理由を確認することができ、その理由から、逆境体験に関する調査を回顧的方法で実施することが有用であろうことが確認できた。

逆境体験に関する調査を実施している事例をみると、10 歳代、20 歳代の時点で 18 歳、または、現在までの経験を尋ねている問いを多く確認できた。

これらの結果から、10 歳代後半から 20 歳代前半時点で回顧的な調査を実施することで、一定の結果を得ることができるであろうことが伺える。

しかし、事例収集結果は事例数が少なく、一つの事例の調査項目を 1 件ずつカウントしていることから、回顧的な調査項目や逆境体験に関する調査項目を多く設定している事例の影響を強く受けている。また、調査対象者の年齢と回顧している時点の詳細を把握できていないことから、事例からは回顧期間の詳細を確認することはできていない点には注意が必要である。

21 世紀出生児縦断調査における回顧的項目の導入は、子どもの成長過程における過去の経験の重要性を捉え、より精緻な分析を行うための有益な試みである。今回の調査研究で指摘された、記憶の不確実性や回答者の負担といった課題に留意しつつ、具体的な質問内容、適切な時期、質問形式、などを慎重に検討する必要がある。その際に必要なのは、教育政策に資する分析のために必要な項目は何か、という視点である。有識者からの貴重な意見も参考に、縦断調査の特性を活かした効果的な回顧質問項目の設計と配分を進めることが、今後の教育政策の立案に資する上で極めて重要である。

V 参考資料

1. 本報告書で参照・言及した文献について

発行機関・著者等	発行年	文献名等
文部科学省	2024	若者の生活や意識に関する調査分析
長尾 博	1997	思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響～展望法と回顧法を用いて～
神村栄一・向井隆代	1998	学校のいじめに関する最近の研究動向―国内の実証的研究から カウンセリング研究, 31, 190-201
高坂 康雅	2007	回顧法による青年期における劣等感の発達的变化
平沢 和司	2015	世帯所得と子どもの学歴―前向き分析と後向き分析の比較―
青柳 健隆・石井 香織・柴田 愛・荒井 弘和・岡 浩一朗	2017	学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ参与の関連～回顧的データに基づく持ち越し効果の検討～
保田 時男	2017	回顧式家族調査 NFRJ-16R のねらいと経過
松原 岳行	2019	児童生徒の道徳性形成要因に関する予備的研究～大学生を対象とした回顧的調査の結果～
梅津 直子・新井 邦二郎・会沢 信彦	2023	思春期における無視, 仲間はずれ, 陰口はなぜ生じるのか?～中学生における関係性攻撃動機の質的検討および動機と加害立場・侵害意図との関連～

2. 本報告書で参照・言及した調査について

実施機関	発行年	調査名等
文部科学省	2024	若者の生活や意識に関する調査分析
法務省	2023	非行少年と生育環境に関する研究
大阪府	2022	健康と生活に関する調査
公益財団法人日本財団	2022	第 5 回自殺意識全国調査
日本家族社会学会全国家族調査委員会	2022	青年期から成人期の振り返り調査
独立行政法人国立青少年教育振興機構	2021	子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究
独立行政法人労働政策研究・研修機構	2010	労働政策研究報告書 No.125 学校時代のキャリア教育と若者の職業生活
筑波研究学園都市交流協議会	2019	第 7 回生活環境・職場ストレス調査

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託業務として、株式会社サーベイリサーチセンターが実施した令和6年度「公的統計調査等を活用した教育施策の改善の推進するための取組」の成果をとりまとめたものです。

